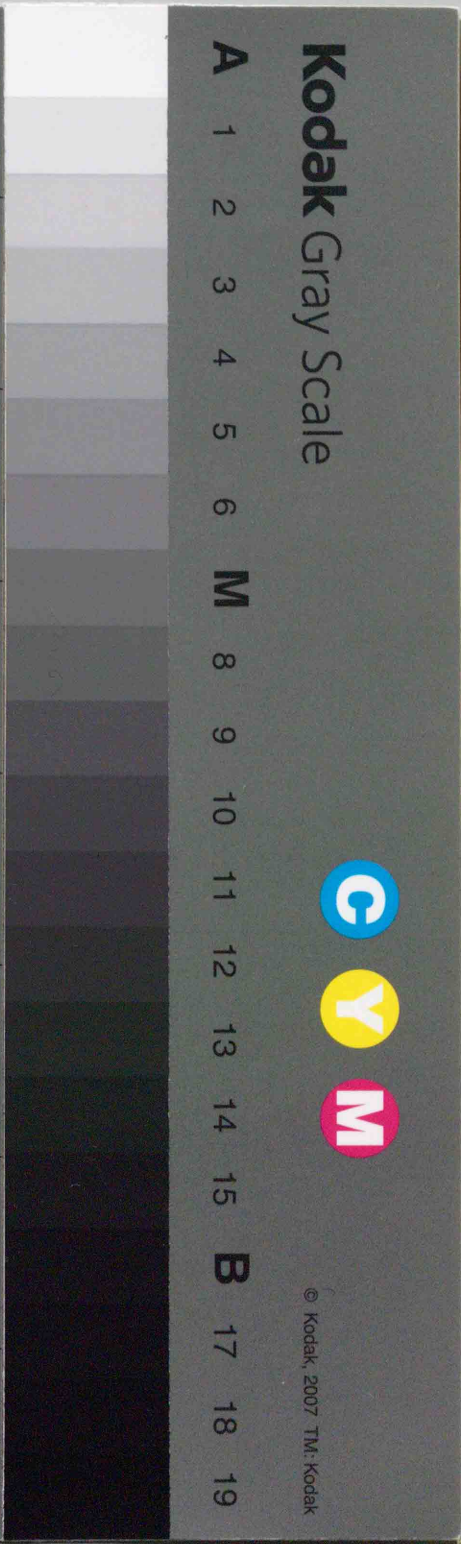
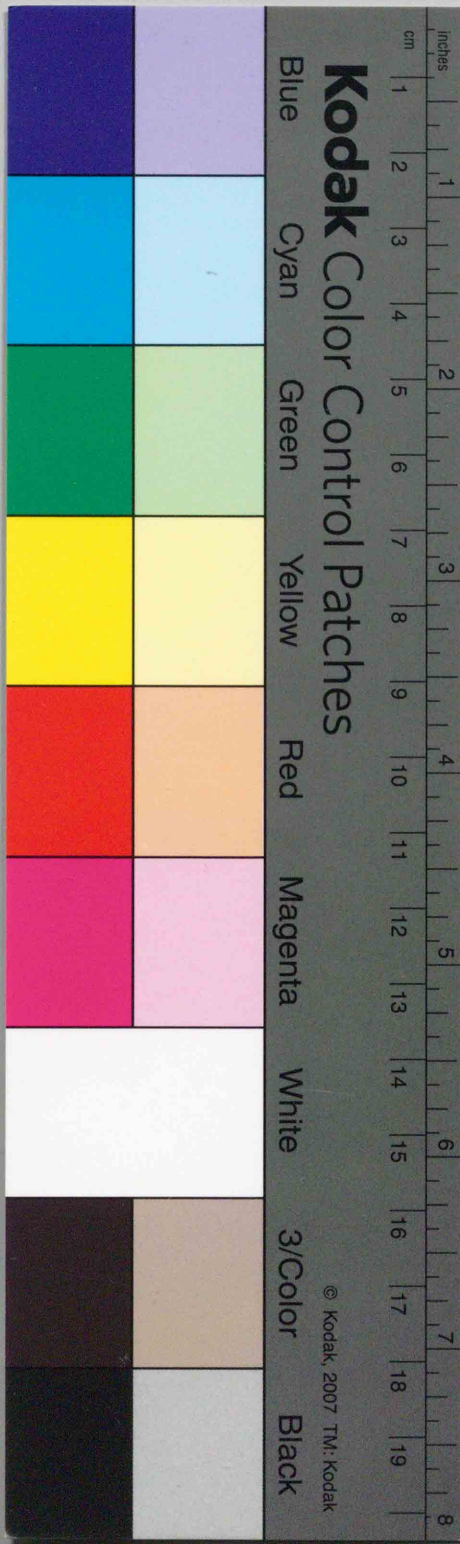


4a
810
B2

編吉則波八
現代國語讀本
(修正版)
卷八

東京關成館藏版

教科
41
200



41429
教科書文庫

4
810
41-1927
20000
90696



文部省檢定
昭和二年五月十五日
中學國語教科用

教科書文庫
4
810
41-1927
2000090696

八波則吉編
現代國語讀本
(修正版)



東京關成館藏版

広島大学図書
2000090696


資料室

4a
810
AB2

現代國語讀本 卷八

目次

一	新人の資格	帆足理一郎	一
二	人及び人の力	永井潜	二
三	吾人は須らく現代を超越せざるべからず	高山樗牛	三
四	高山樗牛氏を懷ふ(自修文)	近松秋江	四
五	五月を眺めて(詩)	室生犀星	五
六	詩人西行	藤岡作太郎	六
七	新古今集の歌(和歌)		七
八	柿山伏(狂言)	(狂言記)	八
九	京囚江戸送(自修文)	中村吉藏	九

一〇	ベートーヴェン	中澤臨川	六
一一	朗詠	大西祝	七
一二	俚諺論		
一三	追憶と旅愁(自修文)		
	一 追憶		八
	二 旅愁		九
一四	登山と修養	小島鳥水	九
一五	山頂の空	榎有恆	九
一六	義士討入の綱領	福本日南	一〇
一七	近代の和歌(和歌)		一一
一八	行く川の流	鳴長明	一六
一九	古文断片		一七
二〇	元祿調(俳句)		一七

二一	芭蕉の俳句を評す	正岡子規	一六
二二	越路の芭蕉(自修文)	吉田絃二郎	一七
二三	奥の細道	松尾芭蕉	一四
	一 首途		一四
	二 白河の關		一四
	三 壺碑		一四
	四 松島		一四
	五 平泉		一四
二四	佐藤忠信	(義經記)	一五
二五	攝待(謠曲)		一五
二六	家(詩)	石川啄木	一五

現代國語讀本 卷八

一 新人の資格

帆足理一郎

1. 改造！改造！ 世界大戦後社會改造の叫は潮のやうに湧立つてゐる。政治に、經濟に、教育に、家庭に、思想に、生活に、宗教に、道德に、改造の火の手は四方八方から燃上つてゐる。

2. 改造には新人を要する。日本が社會改造のために要求する新人は、如何なる資格を備へたものでなくてはならぬだらうか。

3. 改造されるべき日本の要求する新人の第一の資格は、個々の人格觀念の強い人でなくてはならぬ。人格の觀念とは何か。人間は生れながらで個人ではあるけれども、まだ人格者ではない。人

1. 起論

一、ちりゆきまに
改造の空を走る

帆足理一郎
福岡縣の人、
明治十四年
生、哲學者
早稻田大學講
師
文明批評家

2. 本論の連続

一、改造には新人の必要
二、新人の資格とは何か

3. 本論 新人の資格とは何か
一人格觀念の強弱のこと

個性尊重
良心の自由と自覚
それにも責任

二人格によつて評價す

社會奉仕の念に
満ちた人となる
新人の資格

三、自主獨立の精神

(自負、自立、孤立)

四、職業に對する態度を改めんとす

(職業を通じて人格的修養をす)

五、過去に満足せず

後極的進取の無限の向上とある

六、結論

格は個性の努力によつて贏ち得られるものである。然らば我等は如何にして人格の觀念を體現するか。個人が一個の人格者であるには、たゞ自分が獨得の個性を有する人間であると自覺するだけでは駄目である。自分の個性を尊重することは勿論必要であるが、人格の人はこれと同時に良心の自由とその責任とを自覺しなくてはならぬ。權門に阿り、利達に目を眩まして、良心の自由を缺く人は、主義を以て立ち、正義のために犠牲となることが出来ぬ。我等は屢、飽くまでも個性の自由を主張しようとはするけれども、個性の自由の反面である責任の觀念を等閑に附する傾向を有してゐる。しかし、我等は自由意志、自由行動の他面には、自分の言行に對する道義的責任の一切を潔く引受ける感じが強くなくてはならぬ。良心の自由を主張する我等は、常に我が一舉手一投足が如何に深く遠くその活動を傳へて、一切の社會關係に切實な



帆足理一

影響を及ぼすかを自覺しなくてはならぬ。それゆゑ、偉大な人格者とは、自分の行爲の結果を出来るだけ博く深く意識して、その結果に對する責任の感じを益、強め、若し惡影響、惡結果を惹起したなら、徹頭徹尾これを改造し、そのために却つて一層好ましい結果を齎すやうに努力するものをいふ。責任の觀念の存する所、そこに精神生活の擴張があるのであつて、人格の向上とは自分の精神生活を益、擴張させて行くことに外ならぬ。責任の觀念の薄いものは孤立、孤獨の人である。人格とは社會化された個人をいふのであつて、自分の職分とか理想とかいふものの意識、または直接個々の行爲に對する責任の觀念が強ければ強いほど、その人は自分を社

會化し人格化するものである。
 第二の資格は、對社會的に人を評價し、または取扱ふ場合に、その人の人格によつて價值を測定することである。改造後の新人にはこの修養が必要である。即ち他人を評價する場合に、その人の地位や財産や門地や官爵や職業によつてこれを定めず、その人の道義的資格を以てこれを判断すべきである。人の尊敬すべきはその人の實力である。苟も廣汎多角な知識を養ひ、高尚な趣味を持ち、高遠な理想を抱き、豪邁な氣象に充ち、高潔な情操を保ち、社會奉仕の精神を以て日々の生活にいそしむ人なら、その職業の如何に拘らず尊敬すべきである。それと同じく、自分自身も、自分の地位や職業などの如何に拘らず、自分が一個の人格者として社會の一員であることを自覺し、自分の職務を通して社會に奉仕する、即ち何か他人のために役に立つことをなし、それを無上の快樂とする。

五ノ仁ヲ云フ

る人間となることを心掛けなくてはならぬ。社會に奉仕するとは、決して無我的に自分を没却することではなく、自分を擴張して、社會の人々を自分の生活興味の中に包容することである。つまりそれは自分の伸長であり、自我人格の發展に外ならぬのである。それゆゑ、苟も人間を評價する場合に、その人が社會奉仕の精神に充ち満ちてゐるか否かを見れば、その人の人格を正しく評價することが出来る。換言すれば、改造後の新人は社會奉仕の精神に充ちた人格者でなくてはならぬ。
 第三の資格は、自主・獨立の氣象に富み、自治の精神を體現することである。自主・獨立とは自負・孤立のことではない。人間は社會的產物であるから、社會を離れて生活することは出来ぬ。しかし、個人は社會的生命的流の一中心として存在するのであるから、自分の勞作によつて生活する心掛がなくてはならぬ。自主とは必

ずしも自分が商店の主人となり工場の持主になることではない。また他人の下に働くことを避けることでもない。一事に於て自分が指導者であり得れば、他事に於ては他人が指導者であることを認めて、自らその指揮の下にあるのは、決して自主の精神を害ふものではない。それゆゑ、よし他人の店舗に雇はれ、他人の幕下に働いてゐても、各、その分に應じてその職責に忠實であれば、即ち自主の要諦を得たものである。また獨立の意を誤解して、たとひ小資本でも事業は必ず個人で經營するのが宜いなどと考へてはならぬ。團體的經營の方が社會一般の公益に資することが多い場合でも、なほ個人の獨立經營を望むものは畢竟自我的人間である。眞の獨立は、許多の團體的生活に於て、その團體員である自分の資格に相當する責任の地位に立つて、自分の持場を勤勉に處理して行くことである。中には人を使つて仕事をすれば、それで自

トルストイ
ロシアの思想家
作家・小説家
(1810-1910)



トルストイ

分が偉くなつたやうに思ふものもあるが、トルストイは自分で出来る仕事を他人にして貰ふことは罪惡であるといつて、靴の修繕までも自分でしたといふことである。眞の自治とは無政府無秩序の反對であつて、自ら規律統一のある生活を營むことである。小は自分一個の問題から、大は自身の家族、自家の産業などの問題に至るまで、凡べて自分がその主要な責任を負ひ、進んで万事を處理する、例へば、自分一家の生計に關しても、鏝一文でも他人に厄介をかけまいといふやうな意氣と抱負とを以て日常の事を處辨する、これが自治の精神である。

第四の資格は、産業または一般の職業に對する態度を改めるこ

とである。從來の社會では、生産・分配などの經濟的活動を單なる物質的蓄財の手段であると思つてゐたが、これは根本的に間違つた考である。産業は單なる經濟的活動ではない。それは人間生活に必須缺くことの出來ぬ活動であつて、我等は自分の職業的活動を通して自分の精神生活を向上させるのである。しかし、産業的活動によつて自分の心靈を鍊磨すると否とは、我等が職業に對する態度如何によつて定まる。その職業を通して社會生活の向上發展に貢献しようと努力する人は、常にこの態度によつて自分の精神生活を豊富にして行くのである。かやうな人は、如何にすれば自分の職業が常に社會の要求に副ひ、また文化的向上に資するかを念頭に置くから、益、社會奉仕に便宜な職業を求め、やうになるであらう。また職業を神聖なものとし、古の所謂聖者達が俗世間の職業を棄てて山に入り、僧院に遁れ、ば精神修養に専心で

あることが出來ると思つた妄想を打破し、寧ろ日々の職業生活を通してこそ、却つて人間の靈的生活は洗煉されるものであることを悟るであらう。それゆゑ、これまで俗世間の俗事であると輕蔑されてゐた職業生活を道德化し、聖化しようとする態度を執り、これによつて自分の人格的精神修養をなすことが肝要である。

第五の資格は、宇宙の創造的進化を信じ、積極的・進取的活動の人として、人類の文化を無限に向上發展させようと努力奮闘することである。これまでの社會は靜的・固定的であつて、道德は消極的に「勿れ主義」を採り、惡をなさぬ人は即ち善人であると見做したのであるが、改造された後の社會は殊に動的の社會であつて、万事積極的であるべきであるから、從來のやうに、或種の徳目に拘泥してこれを遵守するのを道德の第一義としたやうな生活は、斷然これを改めなくてはならぬ。我等は他律的に道德に服従するのでは

なくて、自律的、自發的に進んで一層高い道德の標準を創造して行かなくてはならぬ。高い道德の標準は即ち高い道德の實行によつてだけ成立するものであるから、自分の創造的行動を自由に働かせて、一層大なる新しい善を行ひ美を創めて行かなくてはならぬ。

帆足理一郎

帆足理一郎自署

新人は必ずしも過去を侮蔑せぬ。過去は單に現在及び將來の材料に過ぎぬ。新人は過去のために活きないで、將來のために活きる。それゆゑ、過去が打建てた悪い偶像を遠慮なく破壊して、新しい世界を建設して行く。随つて改造行爲は一回や二回では完成されぬ。否、改造は連續的のものであるから、絶間のない改造、即ち創造的活動に従事しなくてはならぬ。我等の要求する新人は、改造行爲が無限に繼續されるものであるべきことを信ずる人で

永井潜
東京市の人、
明治九年生、
醫學博士、東
京帝國大學教

なくてはならぬ。生命は絶間のない成長であり發展である。改造されて「それで宜しい」といふほどの社會が現れたなら、その社會は既に生命を失つた社會である。生命は絶間のない欣求であり、憧憬であり、努力であり、奮闘である。この奮闘的精神、創造的努力のない人には、新人の資格がない。4そして、我等は最後に總括的に附加していふ、社會改造とともに來るべき新人は、社會生活に於ける聖い愛の奉仕に依つて人格を向上發展させることが、人生その物の目的であることを信じ、その目的のために努力奮闘する積極的活動の勇士でなくてはならぬ」と。(社會と人生)

二 人及び人の力

永井潜

生命は最も偉大な謎であり、そして、生活體は確に宇宙の驚異である。土に落ちる一粒の種子、それには眞珠の光がなく、寶玉の輝

きもないけれど、靜にこれを觀ずると、我等はその物に於て、眞珠よりも寶玉よりも、より尊く、より驚くべき或物の存在を認めないで居られない。日が温め、露が潤す時、愛らしい嫩葉が芽ざす、絹糸のやうな白根がおろされる、延びる、太る、眼も眩むばかり美しい花が開く、枝もたわゝに實が生る。種子は實に命のない土から命のある物を造り出す。そして枯死する。しかし、常に新しい第二の我を生じて、終に永遠に生延びる。一粒の種子——その中には長への命の力が秘められて居る。

その中でも、あらゆる生物の中で最も進化して居るところの人間に於ては、特にその感を深くしないでは居られない。^{〔希臘〕}ギリシヤの大哲學者ソクラテスは、常に「自分自らを知れ。」と教訓した。自分自らを知ること、人間が人間自身を徹底的に知ることが、即ち人生の最後の目的であらう。世の中に不思議な物は少くないが、人間

ソクラテス
前470—前399

スフィンクス
人面獸身の怪
物、朝は四足
晝は二足、夕
は三足で歩む
ものは何と
いふ謎を出し
たか



ソクラテス

想像上の動物
Sphinx
スフィンクスがあり、そのスフィンクスが大きい謎を出したとすると、その最大の謎は人間といふ謎でなければならぬ。

この偉大な謎である人間を、機能的の方面から動物と比較して、私は先づ第一にかう言はうと思ふ。「人間と動物との機能的の差別は、人間は文化を持つて居るが、動物は自然の状態である。」と。抑、文化とは何かといふに、それは人間が自己の意志によつて自然を左右することである。動物は自然のまゝに甘んじて生きて居る。と

ころが、人間は自然のまゝには甘んじないで、それに自己の意志を加へようとする。これが人間の人間である所以である。自然は譬へば曾て斧鉞の入らない大森林のやうなものである。文化は譬へば一木一石悉く人間の趣味を現した庭園のやうなものである。磊々たる一塊の大理石は自然であるが、文化はその大理石に藝術家が思ふまゝに手を加へて造り出した立派な彫刻物である。即ち自然のまゝでは足りるとしないで、自然を支配し、自然を利用しようとして、茲に文化が始まるのである。これが人間の尊い點である。

抑、自然の出來事は、全く定まりきつて動かすことの出來ない型



スフィンクス

に嵌つた規則によつて支配される。ところが、文化はさうでない。文化はそこに人間の自由意志が働き、人間が或目的を逐うて、自然の上にその意志を實現して行く。自然界は一大機械であつて、どこまでも自然科学の嚴格な法則を以てこれを律することが出来るけれども、文化は決してさう簡單なものでない。文化は目的によつて成立つが、自然はたゞ法則によつて動いて行くだけである。

勿論人間はやはり一種の自然物であつて、自然界の現象として見ると、人間も一個の生物であり、現象界に通有な同一の物質、同一の力、同一の法則によつて左右されて居るけれども、人間を、文化を作るものとして、目的の上から、また價值の上から眺めると、全然他の



永井潜

自然物と區別して考へなければならぬやうになる。
 かやうに、文化を作ることには人間の仕事であり、文化的生活は人間の努力の結晶である。しかし、人間の努力、人間の仕事には、人によつて種々の階梯がある。即ち未開人に於てはこの努力は頗る微弱で、所謂人間固有の文化はまだ、自然その物に近い。ところが、人間のこの努力が漸次に強くなり、自然を超越して、その力を自然の上に實現することが著しくなるに伴うて、文化は益、高くなる。未開人に於けるこの努力は、たゞ單に自己を維持して行くため、就中自己の生命を繋いで行くために、直接に最も必要な食物を探し求めることに限られて居る。随つて、彼等の精神生活には、ただ自己といふ考、たゞ現在といふ考しかない。未來もなければ、また過去もない。意識された欲望としては、即ち自己生存があり、種族保存があるだけで、殆ど動物と選ぶところがない。現代の野蠻

フイヒテ
 ドイツの哲學者
 (1762-1842)



フイヒテ

人を見ても、その生活は全然利己的で、自己の生命を維持するためには、他人の肉を喰つても平然として居る。

が、人間がこの状態を脱して次第に文化に進むのは、決して外から餘儀なくされるのではなくて、實に人間本然の要求、人間の心の中にある已むに已まれぬ衝動がこれに鞭を加へて居るからである。フイヒテは言つた、誰もが文化に導かれるのではない、自分自身が文化を作るのである。この内的衝動の根柢を現すものは何かといふに、それは人間の優越した精神作用が雜駁な自然現象に對して抽象概念を作り、混亂から統一に、偶然から意志の自在に移り行くことにあると信ずる。それが抑、人間と動物との間に厳格な區別を起した大原因である。そして

また、これは科學の根柢であり、哲學の根柢であり、宗教の根柢であり、道德の根柢であるのである。



これを社會生活について考へて見ると、人間が單に飢餓の奴隷となり、自己生存にだけ孜孜としてゐた時代には、たゞ現在があるだけで、過去もなく、況や將來もなく、時間の觀念も發達せず、單に自己があり現在があるだけで、他を顧みる餘裕がなかつた。ところが、子孫繁榮といふことが人間生活に於て重要な地位を占め、理性的、永續的の色彩を帶來つて、家庭を作り、子女を教養するやうになると、茲に始めて博愛、犠牲、同情、從順といふやうな道德倫理の根柢が築かれ、そしてまた、産業といふ永續

的の目的を有する仕事も起つて來た。思ふに、自己の飢餓を満たすばかりでなく、進んで一家の飢餓を満たさうといふ冀望が、産業的努力を喚起する上に最も有力な動機を與へたのであらう。

永井潜自署

ふたつ

かうして、獵者の生活は牧者の生活に、牧者の生活は農業者の生活に移つて行つた。そして、眞の産業が始めて堅固な立場を見附けたのである。

永續的産業の發達は、時の觀念を喚起し、秩序の觀念を喚起し、所有の觀念を喚起し、數の觀念を喚起する。そして、これは皆一の「努力」の賜物であつて、文化生活の基礎をなすものである。この大きな努力に動機を與へたものは、上述のやうに、自己ばかりでなく、家族の生存維持である。

Emerson は、「雪なき所に文化なし。」と言つた。雪のない所に文

Emerson
米國の詩人
1803-1882

化がないとは、即ち文化が努力の賜物であることを最も巧妙に言表したものである。人間がたゞ大自然の濫い懐に抱かれて、自己の飢餓を満たした、現在に生きるのには十分な食物があつて、何等の努力をも必要としないやうな状態にあつては、決して産業は起らない、また起す必要もない。しかし、人間が困難と戦ひ、自己及び自己の種族の保存を確實にして行かなければならない必要を感じると、茲に始めて有力な鞭が加へられて、文化生活の緒を起すやうになるものである。

大學二番で卒業

當り一番は稀崎潮凡

三 吾人は須らく現代を超越せざる

べからず

高山樗牛

吾人は想ふ、平和は餘りに長く此の世に續きたり。斯くて人は此の平和の世の長きに慣れて、餘りに平氣になり過ぎたるにあら

三學期始

業

高山樗牛
名は林次郎、
山形縣の人、
文藝批評家、
文學博士、
明治三十五年
歿、年三十五年

鮑魚の肆
與善人居
如入芝蘭之
室、久而不
聞其香、即
與之化矣、
與不善人居
如入鮑魚之
肆、久而不
聞其臭、亦
與之化矣、
(孔子家語)

ざるか。

怪しむを要せざるなり。鮑魚の肆に入るものは、久しうして其

の臭きを忘るゝが如く、彼等は凡べての物に對して驚きの心を喪

へりとおぼし。憂あれども憂へず、悲みあれども悲しまず、疑ふべ

きに安んじ惑ふべきに住まへり。文明の苦痛は此の世の上下に

充ち満つれども、彼等は恬として省みず。唯々名聞利達の外に世

間又疑惑なるものの存するを解せざるもの如し。嗚呼、人は何

時まで自ら欺かざるべからざるか。

現世に於ける一切の學智と道德とは、其の根柢に於て既に現世

を是認す。彼等は現世を超越せずして附隨し、審判せずして讚美

し、戒飭せずして阿從す。一代の文教詮じ來れば現世の註釋に外

ならざるのみ。

山に入つて山を見ず。此の世の真相を知らんと欲せば、吾人は

三 吾人は須らく現代を超越せざるべからず

吾人は須らく現代を超越せざるべからず
高山林次郎

須らく現代を超越せざるべからず。生れながらの小兒の心を以て一切を観察せざるべからず。

嗚呼、小兒の心か。玲瓏玉の如く、透徹水の如く、名聞を求めず、利達を

願はず、形式方便習慣に充ち満てる一切現世の桎梏を離れ、あらゆる人爲の繫縛に累はされず、唯々本然の至性を披いて、天真の流露に任ずるもの、嗚呼、獨りそれ小兒の心か。

吾人もと學なく才なし。唯々野性の生れながらにして、移し難きものあるのみ。年來人に離れ、世と絶し、藐然として天地の間に嘯く。潜に想ふ、此の心それ或は小兒の心に通からんか。願はくは依つて以て聊か平生の疑惑を陳べ、録して大方の教を請はんか。人の生を求むるは此の生に價值を認めればなり。即ち知る、人

吾人は須らく現代を超越せざるべからず

高山林次郎

高山林次郎筆蹟

ちいせに手ゆせ、(木刻) 轉して 自由を奪ふべからず

生は畢竟價值に外ならざるを。

人生既に價值なり。是を以て人生の歸趨は常に最大の價值と相伴ふ。最大の價值の存する所、即ち此の價值の所有者に取りて



人生の全意義の包括せらるゝ所高なり。至上の幸福茲に在り、最高の道義亦茲に在り。絶對なり、無上なり。苟も自我の存在する限り、天上天下無二無三の尊貴なり。

人は是が爲の故に執着し、欲求し、煩悶し、戦闘す。時として繼ぐに死を以てして悔いざるなり。豈に啻に悔いざるのみならんや、彼は斯くの如くにして其の生存の意義を全うし得たるを喜ぶなり。看來れば、事體極めて簡明なるに非ずや。吾人は生く。生くる

は價值の爲なり。即ち最大の價值と共に生き又死するは、理の當然にして、事の必至なり。斯くの如くにして吾人は此の世に生死する能はざるか。

人生の價值なるは既に之を了す。而して記せよ、價值は之を有する者のみの價值なり。能持の主體を離れて世間又價值なるもの存せざること、猶眼を去りて色なく、耳を外にして音なきが如し。即ち價值の物たる主觀的なり。常に主觀的なるのみに非ざるなり。價值は畢竟個性の反應に外ならざるを以て、同一事物は必ずしも凡べての人に對して同一價值を有すること能はず。即ち價值は主觀的なると共に個人的なり。

既に個人的なり。是を以て、價值の物たる、學ぶべからず、受くべからず。辯以て強ひ難く、力以て傳へ難く、言語理解を超絶して、人之を自得するの外なきのみ。換言すれば、價值は自ら之を創造

し得る者にして始めて其の所有者たり得べきのみ。

人生既に價值なり。而して價值の主觀的にして個人的なる、亦既に斯くの如し。畢竟生を此の世に享けて茲に自ら人生の價值を造り、其の價值の最も大なるものに隨つて安住の地を求めんと欲す。人生の意義又盡せりと謂ふべし。(樗牛全集)

自修文

四 高山樗牛氏を懷ふ

近松 秋江

私は只今東海道興津清見瀨の海岸に避暑に參つて居りますが、今晚はこちらで皆様に對してラヂオの放送を頼まれましたので、一寸歸京した次第であります。私はまだ自宅にラヂオの機械を設備して居りませんから、どの程度の音聲でお話し申したならば、皆様によく聞取れますか、その邊は甚だ心許ないのであります。

近松秋江
本名は徳田浩
司、岡山縣の
人、明治九年
生、文學者
興津
靜岡縣
今晩
大正十四年八
月五日
こちら
當時の東京放
送局

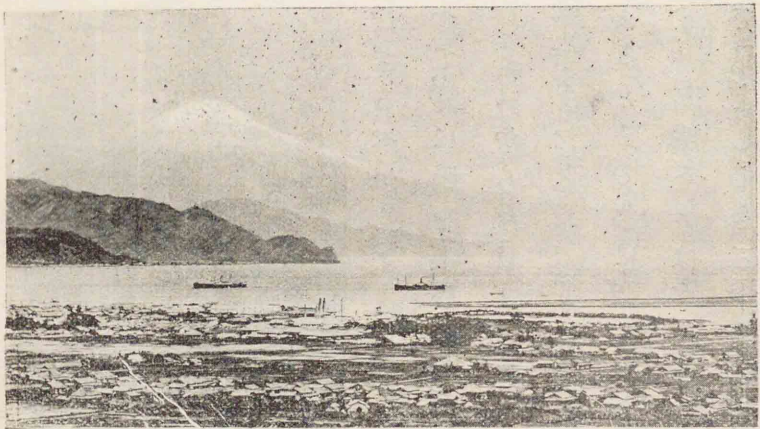
物故
死ぬ

姉崎嘲風
名は正治、
都市の生、
治七年、
博士、
國大學、
東京、
教授、
文章の書きお
こし
三月
明治三十三年
函嶺
箱根

兎に角是から「高山樗牛氏を懷ふ」といふ題について、私の考を少しばかりお耳に入れます。

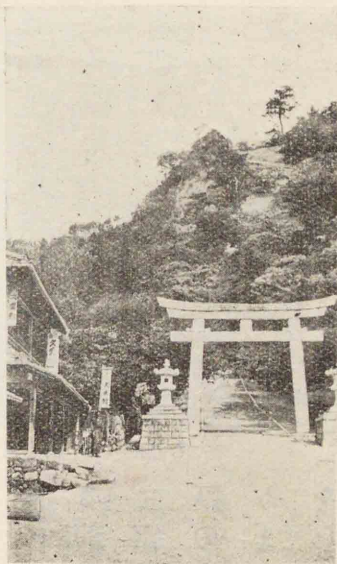
今日は一般思想界及び文藝思想界が二十餘年前とは随分變つてゐますから、多くの人の中には、或は今から二十餘年前に物故した高山樗牛氏については、記憶もなく、また興味も有してゐない方があらうと存じます。けれども、一部の青年男女の間には、氏は今日もなほ依然として生きてゐます。興津清見瀉は氏が生前最もその風光を愛した處でありまして、今日でも若い人達の胸に共鳴を與へてゐるあの多感多涙な、我が袖の記」といふ美文は、この清見瀉の明媚な自然が氏の胸にインスピレーションを起して出來たものであります。また氏の感想文の中で最も出色なものの一つである所の「姉崎嘲風に與ふる書」の冒頭の一節に、「三月、君が西航の首途を横濱に送りたるの日、予は西の方函嶺を踰えて駿州に入り、

恍
うつとり



清水港から清見瀉を望む

清見瀉の海樓に宿りて、離別の悶を遣りたりき。この夜、月明に星稀に、一灣の風露恍として夢の如し」といふ、あの流麗な名文は、それが發表された當時、私共は青春爛な時であつて、愛讀諷誦片時も措きませんでした。興津から清見瀉の灣を距てて、あの徳川家康を祀つてある駿河の久能山の東麓にある龍華寺は、三保灣の入江を控へ、間近に富岳の秀麗な姿を仰ぎ、東海悉く勝區の中でも、最も風景の優れた處であります。氏は特にこの地を愛し、遺言をして此處を埋骨の地としたのであ



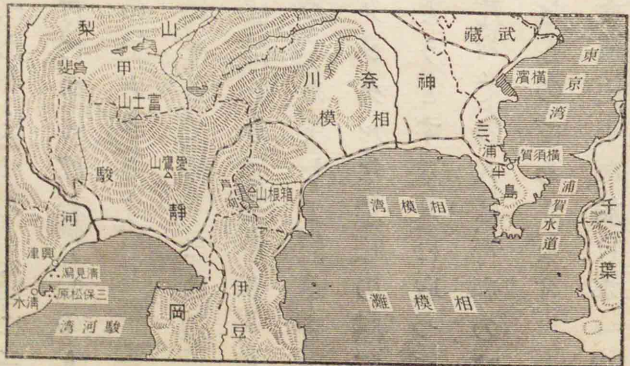
久能山

ります。私は此處の墓域が修せられた翌年かに始めてその墓に詣でて、氏が最も愛したといふ清水港郊外の富士見の風景を賞し、あの有名な吾人は須らく現代を超越せざるべからず。といふ氏の言葉を彫つた大理石の墓標の畔に立つて、靜に氏を懐ひ、願望低回して去ることが出来ませんでした。それから今日まで二十餘年の歳月が過ぎました。そして、私は今年また久しぶりに龍華寺畔の氏の墓に詣りました。聞く所によると、この墓に詣るものは、今日でも跡を絶たないさうであります。勿論それは多くは若い人達ださうであります。これによつて見ましても、二十餘年前に亡くなつた氏は、その著書によつて今

願望
ためらふ
低回
首をたれてさ
まよふ

杜撰
著作に誤の多
いこと

日もまだ其等の青年男女の胸に生きてゐるのであります。日本の明治大正の文壇にも、文名一世を蓋うた大家名流が随分輩出いたしました。死後二十餘年を隔てて、なほ若い人達の胸に深く共鳴を與へてゐる文士はさう澤山はありません。それなら、氏の書いたものはどんな内容を持つてゐるか、と申しますと、それは甚だ若い心持であります。ですから、少し年を取つた人達には、さまでの感興を喚ぶものは或はないかも知れません。また氏の書いたもので、主として大人に讀ませるべき種類のものでも、精確な研究によつて批評しましたなら、勿論杜撰なものもあるといふことであり



ますが、しかし、氏の生命はそこにあるのではありません。僅に三十二歳の壯齡で夭折した氏の全生命は、一口に申せば、若い心の人そのものであつた、青春そのものであつたのであります。

生前の作の一つに、いかに麗しく空に輝けばとて、終りには地に沈むべき日ぞ。青春人にして幾時ぞ、思へば惜しき過去なりき。」といふのがありますが、これは今繪葉書になつてゐまして、龍華寺で人に頒つてゐます。これは極めてセンチメンタルな意味の感想であつて、現實の世界に向つて大いに生きようとする人に取つては、俄に同感し難い所もありますが、しかし、凡べての人は、青春の時期には、得てかやうな感情に支配されがちなものであります。

死後二十餘年を経た今日に於て、日本の文學史上に於ける一個の文士としての氏の特質を思つて見ますと、氏は評論家ではあつたが、結局一個の詩人であつたのであります。その詩人としての

吐露
あらはしのべ
る

氏は、色々な新しい感情を當時の文壇に於て吐露し、氏以前の文學の評論家又は詩人よりも遙に新しく、そして、西洋思想の加味された詩的感情を吐露して、當時の青年に甚しく清新な氣持を喚び起



江秋松近の中送放オヂラ

させたのであります。氏は青春そのものであります。いつも若く、新しい思想の持主でありました。書いた事柄は評論文の形であつても、その中の言々句々は悉く筆者その人の詩人としての性格によつて裏付けられてゐないものはありませんでした。そして、それが青年の胸に高遠な思想と熱烈な感情とを鼓吹しました。それなら、氏の理想は何であつたかと申しますのに、それは詩でありました。

茫漠
ぼんやりして
みるさま

詩とはいふものの、その本質は極めて茫漠たるものでありました。しかし、詩はそれでよいのであります。例へば、墓碑に彫られてゐる「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」といふ言葉の意味も、極めて意義の不明瞭なものであります。しかし、それも、吾々は現代に生きてゐても、それに没入せず、一段と高い處に立つて、それを批評的に見なければならぬ」といふ意味に解してよいと思ひます。そして、その青春の早く過去を悲しみ、或はあの平家の悲壯で美しい滅亡に同情するといふやうな、古來東洋の詩人に通有な哀愁を哀愁そのものとして愛するといふやうな所もありました。が、同時にまた、強い意志を感情化して讚美するといふやうな所もありました。今日なほ龍華寺の墓に青年男女の詣るものが跡を絶たないのは、前申しましたやうに、若い心の持主である氏が、いかに其等の次々生れて来る若い人達の胸に永久に生きてゐるかといふことを物語るものでありまして、それは私が今申したやうなことを分析して、氏の事業を批評するより、一個の詩人としての氏をその著書によつて味つた方が適當であります。氏の書いたものを詩として見ますと、その内容は前申す通り稍漠然とはしてゐますが、批評家として當時の時勢または文壇に對して、剴切な言説を立てたことは勿論でありまして、あの「小説に時代精神を描け」と要求したのは氏でありました。この時代精神を文學や小説に要求したことは、當時にあつては如何にも剴切な要求でありました。爾來二十餘年、文藝思想の状態は可なり變化して參りましたから、勿論その時々思想なり感情なりが小説・戯曲に表されてゐることは申すまでもありませんが、しかし、氏の要求したやうな意味に於ける時代精神が、果して小説に遺憾なく書かれてゐますかどうかは、頗る疑はしくあります。この意味に於ても、二十餘年前に亡

いふことを物語るものでありまして、それは私が今申したやうなことを分析して、氏の事業を批評するより、一個の詩人としての氏をその著書によつて味つた方が適當であります。氏の書いたものを詩として見ますと、その内容は前申す通り稍漠然とはしてゐますが、批評家として當時の時勢または文壇に對して、剴切な言説を立てたことは勿論でありまして、あの「小説に時代精神を描け」と要求したのは氏でありました。この時代精神を文學や小説に要求したことは、當時にあつては如何にも剴切な要求でありました。爾來二十餘年、文藝思想の状態は可なり變化して參りましたから、勿論その時々思想なり感情なりが小説・戯曲に表されてゐることは申すまでもありませんが、しかし、氏の要求したやうな意味に於ける時代精神が、果して小説に遺憾なく書かれてゐますかどうかは、頗る疑はしくあります。この意味に於ても、二十餘年前に亡

夏目漱石
名は金之助、
東京市の人、
文學者、東京
朝日新聞社
員、大正五
年、五十五
歳、歿。

早稲田の學校
早稲田專門學
校、今、早稲
田大學

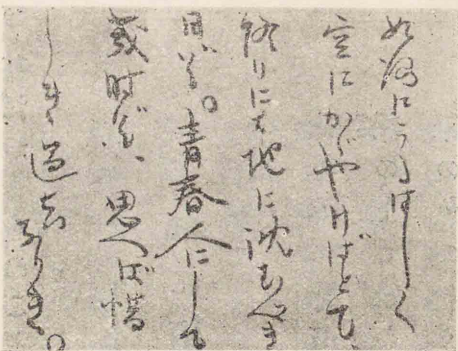
近松巢林子

くなつた氏を今日偲ぶのは、強ち無意味ではないと思ひます。年齢は氏よりも少し多かつたと思ひますが、文士としての名を著した點は氏よりも遅れてゐた故夏目漱石氏は、その生前に於て、樗牛氏を「高山の林公」と呼んでゐました。林公と呼ぶのは幾分愛嬌でもありましたでせうが、漱石氏の意では、「樗牛何者ぞ」といふ考があつたのでありませう。私はこゝでこの二氏に文士としての點數を付けて甲乙を論ずることは慎みますが、漱石氏の一代はなかなか重味があるにはありましたが、しかし、私は樗牛氏の方をより多く天の成した詩人であると思ひたいのであります。

私は今から二十餘年前に早稲田の學校で樗牛氏に一二年教へられたことがあります。私はその二三年前、まだ眼のあたり樗牛氏を見る前から、夙に氏を愛慕して、その文章を耽讀してゐました。その頃氏は「近松巢林子の女性觀」といふ論文を書き、また今日

名は門左衛門、本名は杉森信盛、江戸門前の盛、長門の盛、時代人、浄瑠璃作者、享保九年(一七三六)年、七十二歳、歿。

凛乎
威嚴のあるさま



高山樗牛筆蹟

如何にうるはしく空にかい
やけばとて終りに地に沈むべき日ぞ。
青春人にして幾時ぞ、思へば惜しき過去なりき。

て非常な悦であつたのであります。

樗牛氏を知らぬ人のために、少しくその風采態度を申し上げますな
ら、あの「樗牛全集」の巻頭にある寫眞の通り、實に立派な凛乎として
威嚴のある風采の紳士でありました。私の知つてゐます限りでは、
その文章の壯麗なことと、その風采の整然としてゐることとが、

でもまだ青年男女に愛讀されてゐる「瀧口入道」といふ美文體の歴史小説を書いて、漸く二十二三歳で忽ちにして文名が都門に高くなつてゐました。この一代の才人に、生前に於て接見することが出来ましたのは、今考へて見ましても、私に取つ

渾然
缺點のないま

氏のやうに最もよく合致してゐる人はありま
せん。この點に於ても實に渾然として天成の
文士であり詩人であつたと思ひます。で、私がこの
夏清見瀉に参りましたのも、一つにはさういふ思出を新にするた
めであるのであります。

近松秋江

近松秋江自署

甚だつまらぬことを申しまして、御清聽を煩はしました。

机に倚つて

與謝野晶子

今夜、

私の心に詩がある。
梁の上で跳ねる
銀の魚のやうに。

桃色の薄雲の中を奔る

まん圓い月のやうに。

風と露とに揺れる

細い緑の若竹のやうに。

今夜、

私の心に詩がある。

私はむつとその詩を抑へる。

魚はいよよ跳ねる。

月はいよよ奔る。

竹はいよよ揺れる。

苦しいこの時、

楽しいこの時、

室生犀星
名は照道、
澤市の入、
治二十二年
生、文學者

五 月を眺めて

室生 犀星

夜中に目を覚まして庭より下りると
月が私の家のその真上に坐つてゐる
あるだけの光が注がれてゐる
地は先に打たれて濕つてゐる

今まで静に眠つてゐた自分の家
私が開いた雨戸の音は
夜の葉の上を渡り
月の中心よまで届いて行くやうだ
かしこにもまた何物かがゐる

見下してゐるやうな微妙さが来る
その明るさは未来の心を開く
その美しい光の團聚
盡きない光の泉
絶えず人々の心に入込み
永い生涯のつゞきを考へさせる
光の烈しさ新しさにその方に
今宵も私は抱かれて
眠の中も起されて
底に湛へられた激しさに追はれて
静に庭を歩いてゐる

藤岡作太郎

號は東圃、
澤市の人、
文學者、
明治四年
博士、
四十年卒、
四十一

俊成
藤原氏、平安
朝時代末期の
歌人、千載集
の撰者、元久
元年(八四三)
年九十一

定家
俊成の子、鎌
倉時代の歌
人、新古今集
新勅撰集の撰
者、仁治二年
(一一六二)卒、
八十

藤原秀郷
通稱は田原藤
太、天慶の亂
の功臣

鳥羽上皇
第七十四代の
天皇

六 詩人西行

藤岡作太郎

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しうし、鎌倉室町の世、抑、歌道に於て定家を難せん輩は冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。といはれし時、稱讚の聲また定家に譲らず。近世に至つて、定家の價值いたく墜落したれども、山家集の一書はなほいかなる歌人の机邊をも去らず、西行の名今に噴噴たるは抑、何の故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立つ。義清また勇敢にして弓術を善くす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟ならん。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されども、義清は榮利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機に就いては、或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲康と

嵯峨山城國



て取絶るを思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ愛着の絆を斷つ始ぞと、顧みもせで家を遁れ出で、嵯峨の里に至りて剃髮せりと

同行して鳥羽殿より退出し、又明日を期して別る。次の朝參朝せんとて、約に隨ひて憲康を誘へるに、門の野邊に人立ちさわぎ、内には人の泣きかなしむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、殿は昨夜頓死し給へり。とて、若き妻、老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、棄恩入無爲は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜び

保延
崇徳天皇の年
號(九百一十八)

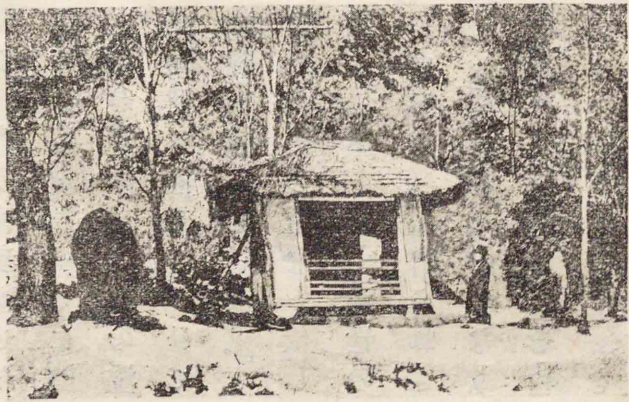
稱す。かくて名を西行と改め、また圓位といふ。出家せし時保延六年にして、西行歳正に二十三なりきといふ。

右幕下
右大將源頼朝

大師
弘法大師

高尾
山城國

西行既に世を遁れて、高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に参り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見参し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて、大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊びたり。常に謂へらく、桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。と。一枚の笠、一本の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ自然を友とし、悠々自適興至れば、則ち和歌を詠ず。高尾の文覺、これを惡み、弟子に告げて曰



吉野山の四行庵

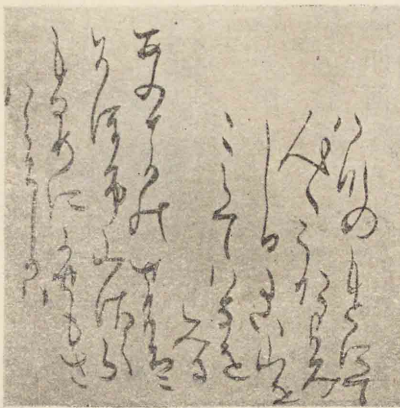
文覺
俗名は遠藤盛
遠正治元年
八十八



僧文覺

く、遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外他事あるべからず。數寄を立てて此處彼處に嘯きありく條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし。と。その後、高尾の法華會に行脚の僧の参りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。誰ぞと問へば、西行と申すもの。といふ。文覺手ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて、明障子を開けて出づ。暫しまもりて、年比承り及びたるに、御訪ね悦び入り候。とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子達は如何なる事の出で來んかと手に汗を握りたるに、この爲體にて、西行は無事に歸り去りしかば、日頃の仰に違ひたるは、と怪しみ問ふ。文覺答へて、あら、言ひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずるものの面やうか。文覺をこそ打たんずるものなれ。と

いへりといふ。
西行深く月花を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて、詠じて曰く、



西行筆蹟

はなのもとに
て人々うたよ
みし日だい
(題)山をこえ
てはなをみる
あふさかのせき
ぢにほふ山ざ
くらもるめにか
ぜもさはらまし
かば

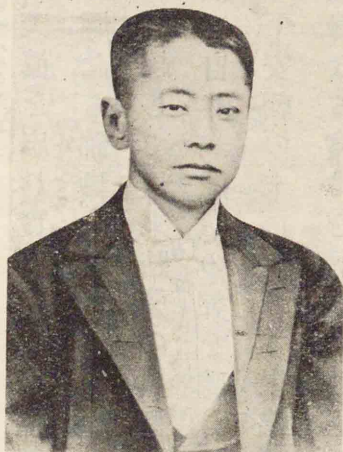
滅せり。

我が國古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの前後僅に三人。

建久
後鳥羽天皇の
年號(六五)
(一六五)

宗祇
號は花の下、
連歌師、文龜
二年(三三)
歿、年八十二
芭蕉
松尾宗房、江伊
賀國の人、元祿
十一年(三三)歿、
年五十一

俳諧の
生布は
寂にあり
松に藤
たて木にのぼる
風情あり



藤岡作太郎

西行宗祇芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、私淑してその跡を逐ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、また西行宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、各その道に一期を劃せし三家が、何れも亦風月に放浪し、雲水に吟嘯せし、詩人を思へば、旅行が如何に詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

抑平安時代の貴紳淑女は僅に賀茂桂二川の流域數里の間を己が世界とし、海をも見ぬ天地に跼蹐して、足畿外に出でず、一生の経過極めて單調に、感情を刺衝するものなければ、随つて思想の發展

三家が何れも亦風月に放浪し、雲水に吟嘯せし、詩人を思へば、旅行が如何に詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

歌の形が
はひも
とほつて
あるが

崇徳院
第七十五代の
天皇

もあることなし。見聞するところは、東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、たゞ同じ詞花言葉を飾るのみにて累代繼承し行けば、和歌の思想、辭句の上にも自ら典型を生じて、天真を忘れ、實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊その内容は空しく、滔々として風を成せる時、西行獨り蹶起して従來踏襲の典型を簸却し、自ら山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聽き、感得するところは、万葉の花と咲けり。平安朝の末に於ける崇徳院の御製が特に斷腸の響あるは、その悲慘なる實境を詠ぜることの世上一般の題詠と選を異にすればなり。分けて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を模倣せず、一字一句皆己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲噴々として天成の大才と許さるゝもまた宜ならずや。(國文學全史)

三大詩集

萬葉集

古今集

新古今集

八高

石井由三郎

竹徹

の歌の調ひ美

② 内容豊富

子規 あり、を 歌

太上天皇
後鳥羽天皇
延應元年(元
心崩御 御年
六十三)

源サ野

明皇

式子内親王
後白河天皇の
皇女

宮内卿
後鳥羽天皇の
宮女

攝政太政大臣
藤原良經、建
永元年(八
元)年三十八
没

七 新古今集の歌

天乃香具山かすまたるびく
ほのくんと暮るる室に來よけり

太上天皇

山乃渡せど山を越えぬ水世頼川
ゆふべ林と何れもむひ常ん
吉の来たともわかつぬか
式子内親王

山加のり
山乃渡せど山を越えぬ水世頼川
ゆふべ林と何れもむひ常ん
吉の来たともわかつぬか
式子内親王
宮内卿

攝政太政大臣

うらゝけりあやめぞかた不杜鶴
かたけりあやめ

鳴くや五月此歌のゆふがくれ

人住まぬ不破乃関屋の板びき

荒れはし後きし秋の風

皇太后宮大夫俊成

駒やめくをほ水はん山吹乃

花のつゆそふ井出は玉川

藤原家朝臣

見渡さるも紅葉もをのり新里

浦乃苔屋の秋北ゆふぐれ

藤原家隆朝臣

浪架乃浦やささぎのり行く浪留とる

こぼりて出づるあり阿希の月

藤原家隆
新古今集の撰
者嘉祿三年
八月七
八十

頼政
源氏、治承四
年(一一八四)歿
年五十一

能因法師

俗名は橘永
博、諸兄十世
の孫、後鳥羽
天皇の頃の人

寂蓮法師

俗名は藤原定
長、俊成の甥、
建仁二年(一一六
二)歿

慈圓

慈鎮和尚、嘉
祿元年(一一六〇)
歿、年七十一

庭乃おもはまた乾あぬに夕立の

従四位頼政

空さるる希るる流める月か那

道ゆためーかたわつた

西行法師

道乃庭に清水流る柳うげ

暫しとておそ立ちどまりつれ

能因法師

山里の春乃ゆふぐれ来て見えど

いりあひの鐘は花ぞ散りける

寂蓮法師

和歌の浦城松花葉越しに眺む

こすふよ雲もあまの船舟

慈大僧正慈圓

有のり月のり方をなごめりけり
 聖寺北鐘鳴きくぐりける
 解に斐り
 三ノ
 小

大峯・葛城
ともに大和國

八 柿山伏

シテ(次第)貝をも持たぬ山伏がく、道をうそをふかうよ。
 是は出羽の羽黒山より出でたる駈出の山伏です。此の度大峯葛
 城をしまひ、只今本國へ罷下る。先づ急いで参らう。誠に行は万
 行あるとは申せども、取分け山伏の行は、野に伏し山に伏し、難行苦
 行を致す。其の奇特には、空飛ぶ鳥をも眼の前へ、祈り落すが山伏
 の行力です。是はいかなこと、今朝宿を早々立つたれば、殊の外物
 欲しうなつたが、あたりに在所はなきか知らぬ。いや、是に見事な
 柿がある。之を打落いて食べる。やつとなく、なか／＼届くこ
 とではない。いや、礫を打たう。是に幸ひ手頃な石がある。之を

打たう。やつとなく、なか／＼そばへも行かぬ。何としたもの
 であらうぞ。いや、是に登つて食へと、言はぬばかりの好い登所が
 ある。是に上つて食べう。やつとな。は、あ、下で見たと違うて
 格別見事な。是はどれに致さうぞ。いや、是がよささうな。是に
 致さう。さてもく、旨い柿かな。此のやうな旨い柿はつひに食
 うたことはござらぬ。今度はどれに致さうぞ。是が見事な。さ
 りながら、是はちと澁さうなが、先づ食べて見よう。さればこそ澁
 い。」(というて種を吹散らす。)

アド「是は此の邊に住ひ致す者でござる。某樹木を數多持つてご
 ざるが、當年は柿が大なり致いてござる。柿と申す物は、えて人の
 取りたがるものでござる程に、見舞に参らうと存ずる。先づそろ
 りそろりと参らう。誠に當年のやうに大なり致いたことはござ
 らぬ。人ばかりでもござらず、鳶鳥もつきたがるほどに、油断のな

らぬこととござる。(廻り掛り柿の實頭にあたる。)はて合點の行かぬことぢや。是はいかなこと、柿の木へいがめな山伏が登つて柿を食ふ。何としてやらうぞ。いや、山伏を荒立つれば却つて仇をなすと申すほどに、散々になぶつて歸さうと存ずる。やあ、あの柿の木の蔭へ隠れたを人かと思へば烏ぢや。シテはあ、烏ぢやといふ。アド、烏といふものは啼くものぢやが、おのれ啼かぬか。啼かずば人であらう。弓矢をおこせ。射殺いて遣らう。シテ啼かずばなるまい。こかあ。アド、さればこそ啼いた。さてよく見れば、あれは烏ではない、猿ぢや。シテまた猿ぢやといふ。アド、猿といふものは身せせりをして啼くものぢや。啼かぬか。啼かずば人であらう。鐵砲をもてこい。打殺いてやらう。シテ身せせりをして啼かずばなるまい。きやあ。アド、さればこそ啼いた。さて、彼奴は物真似の上手な奴でござる。今度はちと彼奴が

困ることがありさうなものぢやが、それ、あれをよく見れば、猿でも烏でもない、鳶ぢや。シテまた鳶ぢやといふ。アド、鳶といふものは羽をのして啼くものぢやが、おのれ啼かぬか。啼かずば人であらう。一矢に射殺いてくれう。シテ羽をのして啼かずばなるまい。ひいよろ。ひいよろ。アド、さればこそ啼いた。最前から間もある程に、最早飛びさうなものぢやが。シテ



(筆洲蓼口山) 伏山柿

役の行者
役小角、奈良
朝時代の人、
本朝修験道の
祖

あとはおのれ憎いやつの。最前から此の尊い山伏を、鳥類・畜類に譬ふるのみならず、剩へ鳶ぢやといふ。總じて山伏の果は、鳶になるといふによつて、身共も鳶になつたかと思つて、あの高い處から飛んだれば、まだ産毛も生えぬものを飛ばせをつて、腰の骨をしたたか打たせをつた。さあ、汝が宿へ連れていつて、看病をせい。」
アド「やい、おのれ憎いやつ。柿を盗んで食ふ山伏を、誰が看病するものぢや。」
「シテ」そのつれなことをいふならば、爲に悪からうぞよ。」
アド「爲に悪からうというて、何とする。」
「シテ」目に物を見せう。」
アド「それが誰が。」
「シテ」身共が。」
アド「そちが分として、目に物を見せたりとも、深いことはあるまいぞ。」
「シテ」ていとさういふか。」
アド「おいでもないこと。」
「シテ」おのれ、悔まうぞよ。」
アド「何の悔まう。」
「シテ」たつた今、目に物を見せう。それ山伏といつは、役の行者のあとを嗣ぎ、難行苦行こけの行をする。今この行力のかなはぬかとて、一禱りで禱つたり。

中村吉藏
島根縣の人、
明治十年生、
劇作家、
京政の大家、
安政の大家、
士が勤王に居、
て江戸に送られ、
たこと、
はつたこと、
この人々とな、
あつたのであ

ぼろおん。橋の下の菖蒲は誰が植ゑた菖蒲ぞ。ぼろおんぼろおん。」
アド「此のやうな處に永居は無用、いそいで罷歸らう。是は何とする。」
「シテ」扱々、是は奇特なことぢや。」
（橋掛りへ行きさうにして、段後へ禱り戻さるゝてい。）
是非に及ばぬ。宿へ連れていつて看病をせうほどに、これへ負はれい。」
「シテ」心得た。きつと捕へてゐよ。」
アド「心得た。やつとな。やい、聞くか。」
「シテ」何事ぢや。」
アド「宿へ連れていつて看病するは易けれども、おのれかやうな柿を盗んで食ふ山伏は、先づかうして置いたがよい。」
（さういふて、真中へ打倒して入る。）
「シテ」やい、やい、此の尊い山伏を此のやうにして、將來がようあるまい。あの横着者捕へてくれい。やるまいぞ。」
（狂言記）

自修文

九 京囚江戸送

中村吉藏

梅田源次郎 號は雲濱、京都の儒者、安政六年(一八二五)四月十四日歿、年五十四
 賴三樹三郎 名は尊、山陽の儒者、安政六年(一八二五)三月三十一日歿、年三十五

品川の宿外れ、一面に黒幕を張りつめたやうな空に、星影が寒く慄へてゐる。上手の松並木が夜風にざわめいてゐる。海の遠鳴りも聞える。覆面した怪しい風體の武士が五六人其處に來かゝつて、互に囁き合ひながら腰の刀に手を掛けて彼方此方見廻し、何かを待構へてゐる様子。甲「あれ、あれ、あの提灯の火がそれらしい。ぬかつてはならんぞ。」乙「いや、あれは唯の通行人かも知れん。逸まつて過をしてはならんが、それにしても、もう頓て此處に來かゝる刻限には相違ない。」丙「網乗物が先で、唐丸籠が後から來るのだらうな。此方はその唐丸籠の梅田源次郎先生、賴三樹三郎先生、吉田松陰先生だけでもお救ひすることが出來れば、せめてもの本望ぢや。」丁「いや、網乗物にも大切な方々がゐられる。女ながら有髯男子も及ばん近衛家の老女村岡刀自を見ごろしにすることは出來ん。それに鵜飼吉左衛門父子は是非とも救ひ出さねば濟まんのぢや。」

吉田松陰 名は矩方、通稱は長州藩士、安政六年(一八二五)十月三十一日歿、年三十九
 村岡刀自 京都の人、近衛家に仕へ、國家に盡力した、明治六年(一八七三)歿、年八十八
 鵜飼吉左衛門 水戸藩士、子の幸吉と共に勤王に盡した、安政六年(一八二五)八月十一日歿、年六十一
 小林民部 鷹司家の世、十一月、安政六年(一八二五)歿、年六十一
 池田大學 京都の人
 浮田一蕙 京都の書家、安政六年(一八二五)歿、年六十五
 安政六年(一八二五)歿、年六十五

や。京都からの勅書を水戸家へ持込んだ手柄のある大忠臣ではないか。

戊「いや、小林民部、金田伊織、池田大學、浮田一蕙、その他の方々も、皆京都表で尊王攘夷のために水火を踏んで、身命を惜しまず働かれたお人達ぢや。それが奸賊のために數珠繋ぎにされて、屠所の羊のやうに江戸表へ引出される、今日のみじめな淺ましい生葬

あ、以、病、体、心、叫、知、此、事、也、
 唯、有、皇、后、土、知、之、
 云、云、

梅田源次郎筆蹟

ハレ、病、体、心、叫、知、此、事、也、
 唯、有、皇、后、土、知、之、
 云、云、

ひの行列を、をめぐり見過しにすることが出来ようか。警固の武士を片つ端から斬捨てて、残らず助け出さねば我々の面目は立たん。」

橋本左内 號は景岳、福井藩士、安政六年十月二十
六日、赤鬼 井伊直弼のこ

甲「いや、御尤も千万なお言葉ぢや。此處で、梅田頼吉、田諸先生方を始め、一同をお助けして、その上、江戸表で召捕になつた橋本左内先生を我が黨の手に奪ひ返したら、尊王攘夷の旗風は再び天下を吹靡かさう。その機會を外さず赤鬼方へ一發打込んで、首を上げて了へば、もう占めたものぢや。我が國土を汚す豚同前な夷狄は残らず血祭にしてのけ、世を天朝の御代にするのぢや。……提灯の火がだん／＼近寄つて来るぞ。」

乙「ではこゝらで待伏の用意をせうか。我々の刀の切味一つが、我が日本國を生かすか殺すか、大切などたん場ぢや。仕損ぜんやうに、覺悟をきめてかゝらねばならん。」

丙「万一武運拙く仕損じたら、潔く切死するか、自殺するか、後に生證據を残さんといふ約束は堅く守らねばなるまい。」



吉田 松陰 武士「正か。」

皆々拔刀する。
編笠に小提灯の武士が忙しく駈けて来る。
武士「あゝ、よく間に合つた、金子ぢや、孫次郎ぢや。あれほど逸まつてはならん、今輕々しく手出しする時ではないと、割つつ碎いつ言つたのを、君方は表面で承知をしたと見せかけながら、そつと拔出して來られたな。武士に二言はない筈ぢやが、此處ではまあ何も言ふまい。たゞ引返され

金子孫次郎 水戸藩士、後井伊直弼門外、つた浪士、久元、五十八

言はない筈ぢやが、此處ではまあ何も言ふまい。たゞ引返され

たい。黙つてこのまゝ引返しなされい。孫次郎が頼むのぢや。甲いかに我々一黨が拔出して参りましたのは重々悪うござい
ますが、どう考へ直しましても、尊王攘夷のためにはあれだけ粉骨
碎身した天下の志士達をおめく、奸黨の役人輩の汚れた手に
渡すのは残念千万で、我々若い者の體ぢゆうの血は沸立ちます。
意氣地なく見ごろしにすることは出来ません。どうしてもこ
こで奪ひ取るより外に途も法もありませんから、どうぞお見遁
し下さいませ。」

一同「何卒このまゝお見遁しを願ひます。」

金子「君方は小事のために大事を破つても差支ないと思はれますか。この金子が薩摩の西郷や大久保としめし合せてゐる一大
事が、こんな軽々しい一舉のために覆される羽目に陥つても、お
構ひない氣か。いかに警固の武士がうつけでも、五人や七人で

西郷
名は隆盛
大久保
名は利通

斬倒されるほど臍甲斐ない者の揃ひとも思はれますまい。さ
すれば、君方は皆好んで犬死をされるのぢや。犬死をするのは
今の若い武士の面目かな。さうではあるまい。さあ、この金子
に黙つてついて來られい。捨てた



中い命を暫時預けられい。どうぢや。」
村一同もちくする。向ふから提灯の
吉火影がちら／＼見える。浪人等はそ
藏れを認めて互に頷き合ひ、すぐ隠れて
しまふ。

妖
星
あやしく光る

「排雲欲手掃妖燐失脚墜來江戸城井底痴蛙過憂慮天邊大月缺高
明。」
詩吟の聲が聞える。唐丸籠が先に、綱乗物が後から、幾つも／＼つゞく。
警固の武士數十人、御用提灯を振りかざし、武器を手にして、前後左右を

固めてゐる。詩吟の聲の聞えてゐた唐丸籠の、五寸の窓から頼三樹三郎が顔を出す。

頼 役人、一寸待て、……一寸待つてくれ。

役人「何用でせう。」

頼「もう江戸もぢきぢやな。愈、江戸へ入るのぢやな。」

役人「さやう、もうぢきだから、どうぞ詩吟などは止めて下さい。道中は万事大目に見て居りましたが、もうお膝元も眞近になつたから、これからは形の通り嚴重にせんと、我々の役目も落度になります。何卒さやう心得て下さい。」

頼「さうか、もう江戸が近いから、今まで通り寛大の處置は出来んといふのか。それも尤もぢやが、先刻から頻りに喉が乾くから、頼三樹三郎にもう一杯末期の酒を飲ませてくれ。もうこれぎりぢや。末期の酒を飲ませてくれ。」

役人「あなたは一日に三升もお上りです。今日はおもつと多量に入つて居りませう。それでもまだ欲しいのですか。」

頼「この頼は酒に量なしぢや。三升でも五升でも構はんぢやあないか。もつと持つて来てくれ。」

役人「一寸上役に伺つて來ます。」(上役人の所へ走つて行く)

頼「勘定を拂はない振舞酒ふるまひざけに有附ありつきくのは、得のやうでやつはり損か、向ふは掛代金を首で取らうといふのだからな。は、は、は、は、は。」

役人「戻つて」では、道中はこれ限りといふお許が出ました。」

「駕籠側に向けた樽を卸して飲ませる。」

頼「ふむ、……美祿、美祿、……時に、この上に今一つ願がある。隣の籠の梅田源次郎殿、その先の吉田寅次郎殿へ、頼が訣別の杯がさしたい。老女村岡刀自始め、一人々々にさしたいのぢやが、酒が足るまい。で、せめて、梅田・吉田の兩所へだけでもさうしたい。何

美祿
酒のこと

卒それを取計らうてくれ。頼が一生の頼みぢや。」

役人「それは御無用です。」

頼「私其方に頭を下げて頼むのぢや。」

役人「いくらお頼みになつてもいけません。」

頼「怒つた聲」上役を呼べ。」

上役人「何卒お静に願ひます。もう江戸城も間近になりました。我

我役目の手前、お咎を受けるやうなことがあつてはなりません。」

頼「さうでもあらうが、五十三次を道連で一緒に長の旅をして來な

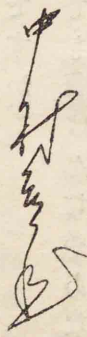
がら、ゆつくりと話も出來ず、顔も見られん。生死を一緒にと誓

つた友達同志が、これではあまり情ないではないか。せめて訣

別の杯ぐらゐらせてくれてもよい筈ぢ

や。汝等もまさか涙のない鬼畜ではあ

るまい。」



中村吉藏自署

上役人「公儀の御沙汰でござります。御定法を曲げることはなりま

せん。」

頼「訣別の杯もさせない……それが公儀の沙汰ぢやと、定法ぢやと、

……ふん、今に見ろ、その公儀の沙汰が鏢一文にも通用しなくな

らう。幕府も滅びる時が來てゐるのぢや。我々が皆自由に思

ふ所を言ひ、自由に欲する所を行はうとするのを、權威を笠に、力

づくで搦め取つて、繩を掛けて、仕置場へ引摺つて行く。豚羊同

前の夷狄の奴輩には祟を恐れて、さはらぬ神様扱にしながら、同

じ日本に産れた同胞を、逆さまに豚羊扱にするこの亂暴狼藉が、

人を怒らせ、天を怒らせずに濟むものか。今日江戸へ送られて

行く天下の志士の一人々々の首が飛んだら、その一つ一つの疵

口から、血の洪水が全國に溢れ出すと思へ。今に見て居れ。こ

の獄卒奴等が……」

松並木の蔭から跳り出でようと逸る人々を金子が制してゐる。

梅田「暇乞の杯はいらぬ。梅田はまだ生きてゐる。」

吉田「寅次郎も無事ぢや。」

役人「しつ、……しつ。お話はなりません。」

上役人「さあ、行かう。」

頼「私もまだ生きてゐる。聲が形見ぢや。」

村岡「えへん、……えへん。」(と咳く)

前後の駕籠から「えへん。……えへん。……」と咳が起る。

頼「あゝ、皆無事か。……私はもう今から辭世の詩を作つて置く。……」

今の後を歌ふぞ。

身臨鼎鏝家無信夢斬鯨鯢劍有聲風雨多年苔石表誰題日本古狂

生。

一行は頓て入つて行く。

鼎鏝 かまいりの刑
苔石 苔のむした石
古狂生 三樹三郎の號

松並木から一同出て来る。

金子(眼を拭いて)「我々が此處に忍んでゐようとは、夢にも思はれなかつたであらうが、聲を聞いたのがせめてもの形見ぢや。……あれだけ國を憂ひ君を思ふ志士の面々の首が飛んだら、ほんにその疵口から血の洪水が溢れて出て、今幕府に蔓つてゐる奸賊等も、我が國を窺ふ夷狄の奴輩も、一度に溺れ死せずには居られない。あゝ、方々の御苦衷のほどは、金子孫次郎お察し申上げる。」(と後影に一禮する)

一同「お助けせんのは如何にも残念に思ひますが、大事の前の小事と聞いては、已むを得ません。何卒お許し下さい。今に仇はきつと取ります。」(と遙に禮拜する) (井伊大老の死)

一〇 ベートーヴェン

中澤臨川

中澤臨川
名は重雄、長
野縣の人、工
學者、文學者、
大正九年歿、
年四十三

悲しみに徹した時に始めてはれる喜び

喜びの喜び
了れ
陽りあふむ
かたあそん

の道や
行く人
船の
著

「悲みを経ての喜び」——これがルドウイツヒ、フォン、ベートーヴェン Ludvig von Beethoven の一生は決して野心家を満足させるやうな教訓をも逸話をも有してゐない。それは苦しんでゐるもののために、眞に苦しむことの出来る力のあるもののために、「聖なる悲みの甘露」を恵むのである。記憶せよ。特に若い人々のためにいふ。——この世は薔薇の花の敷かれた街ではない。それは偉大を希ふものにとつては、常に孤獨と寂寥に追はれなければならない山徑である。最も強いものでさへも、或時は悲哀と失望のために、おのづとその頭を垂れないではゐられない場合がある。記憶せよ。こんな場合に、眞の偉人が汝を助けに来る。ベートーヴェンが汝に役立つ。凡庸な利害得失の世俗戦に倦れた時、ベートーヴェンの持つてゐるやうな信念と意志の世界に暫くでも身を置くことは、どれ

だけ我々にとつて強味であるかよ。偉人の身邊には、言葉にいひあらはすことの出来ない勇氣の感染力がある。我等は運と偶然によつて物質界に成功した著名な人達を忘れよう。たゞ心の偉大であつたものだけがヒーロー^{Hero}の名に値する。人間の偉大さを計る尺度は人格である。我等は成功を説くまい。要は偉大であることであつて、偉大に見えることではない。偉人の生涯は長い犠牲に外ならない。悲惨な運命が彼等の肉と靈の苦みの鐵砧^{鉄砧}の上で彼等の精神を鍛へ上げた。彼等は朝夕に苦痛と試練のパン^{パン}を食べた。彼等は何のためにそれだけ苦しんだのであらう。それは、後の世の、より強い仲間を助けるために、また力と恵みを與へるためであつた。ベートーヴェンは一七七〇年ボンに生れた。彼の祖父も父も

その土地の王室附の賤しい音楽師であつた。彼の母はやはり貧しいコックの娘であつたが、その夫の酒癖のために、一生を一つの樂みも知らないやうにして送つた。

ベートーヴェンは四歳の時からもう音楽を習はせられた。そ



ベートルーヴェン

して、残酷な父のために、死ぬほどひどい苦行をさせられた。十一歳から、或劇場のオーケストラに出、一家の生計を助けねばならなかつた。

彼は十八歳の時、眞實たよりにしてゐたその母を失つた。彼はその以前から一家の主人役として、二人の弟を育てねばならなかつた。彼の父は酒のために全く仕方のないものになりおほせてゐたので、その受ける養老金さへ

ウィenna
オーストリア
の首府
ライン河
ドイツの河

當時歐洲の音楽家

直接子供の手に渡されるといふやうな始末であつた。かやうな苦い經驗は、一生消しがたい深い印象を若い音楽家の胸に與へた。

一七九二年、彼はウィennaへ去つた。傷ましい生活の中にも、さ

すがに若く美しい夢をはぐくんだ静かなライン河の岸邊を見棄

てることが、どんなに惜しまれたことであらう。「我が故郷！そ

こは私が始めて日の光を見たところ、今も昔のやうに美しいところ。』といつて、彼は一生その故郷を慕つた。

その頃から、彼の天才が漸く芽を吹きかけた。一七九六年、彼は

自分の手帳にかう書きつけた。「勇氣！私の身體の虚弱にもか

かはらず、私の天才は前途に輝くであらう。……二十五歳！その

年齢に今私は達した。……この年齢は人間がその全部を發揮せね

ばならぬ時だ。」と。彼はまたかういつた。「私の藝術は貧しいものを救ふより外の目的に捧げられてはならぬ。」と。

ちやうどその頃から、また最大の不幸が彼の身體に一生の宿を取つた。彼は聾になり初めた。世に音楽家はその耳を失ふことほど悲しむべきことがあらうか。彼は堪へることの出来ないほどの苦痛を忍んで、幾年かの間それを人に隠してゐた。しかし、いよいよ恢復の見込の立たなくなつた時、劇しい絶望を以てこれを友達に打明けねばならなかつた。「親愛なる友よ。お前のペーヴーヴェンほど不幸なものはない。私の一番貴い部分である聽感が今私を見捨てつゝある。……すべて私の愛するもの、私に親愛な^{あつちのものを}あらゆるものを捨ててまで、このみじめな^{邪悪な}世の中に生き永らへねばならぬ私の一生はどんなに悲惨であらう。……私はしばしばこの身を呪つた。……私はアルタークから忍従の徳を教はつた。出来ることなら、私の運命が私に與へたところに堪へ忍ぼうと思ふ。しかし、この廣い天が下にも、私ほど不幸な生き物がある

アルターク
ギリシャの倫理
記者・倫理
學者 (50-1)

だらうかと、つらく考へ悩むことがある。……忍従よ。悲しい隠れ場所よ、たつた一つの私の隠れ場所よ。」

一八〇六年、彼はテレゼ・ブロンズウィック、ブランズウィック女史と婚約した。しかるに、この平和もまた永くは續かなかつた。彼等は互に

Terese von Brunswick

相愛しながらも、自然に遠ざかつてしまつた。それからはずつと孤獨の生活が續いた。しかも、それは洗ふやうな赤貧と不遇の生涯であつた。彼は靴がなくて外へ出られなかつたりした。「私は殆ど乞食のやうだ」と彼はいつてゐる。或有

名な曲の出た時などには、僅か七冊しか賣れなかつた。^{その愛も}野心も去つた後、彼に残されたものはたゞ力だけであつた。その力の喜びと、これを表現する必要とが彼を占領した。一八一二年、彼を見た一人は、「どんな皇帝でも、曾て彼のやうに自分の力を意識しはしなんだ。」といつた。

フランス

バカス
ギリシヤ神話
の酒の神、
イマデはジオ
ニゾスといふ
ナポレオン
佛國の皇帝
(1769-1821)

當時、或者は彼の曲をさして「醉漢の音楽だ」といつた。確に醉漢の音楽だ。しかし、彼は自らかういつた。「俺は人類のために喜びの神酒の口を開けてやるバカスだ。俺は精神の聖狂を人間に與へる醉漢だ。」と。

彼はナポレオンを見てかういつた。「俺が音楽の術を知つてゐるやうに戦術を知つてゐれば、彼に教へてやるものを。」と。彼の容貌はナポレオンによく似てゐた、殊にその意志を現す引締まつた口元が。

この「未來の人道」を目的としてその一生を捧げた偉大な靈は、一八二七年、五十七歳を一期として靜かな往生を遂げた。彼は息を引取る前に、自分の一生を顧みてかういつた。「喜劇の終」と。その日は殊に嵐が劇しかつた、二月の寒い空には雪ふゞきがして。「悲みを経ての喜び！」彼ほど聖い喜びに憧れたものはなかつた。

た。彼は悲惨な生活のどん底から、未來の人類のために「喜悅」の福音を歌はうと思つた。彼は幾度かためらひ幾度か失敗した後で、とうとう晩年にその希望を實現した。「第九交響樂」といふのがそれである。

その曲の中途に於て、オーケストラが急に停つたかと思ふと、深い神祕な沈黙がやゝ暫く續く。そして、「喜悅」の神が優しい靜かな歩みを以て人の心の悲みを見舞ふ。次第々々にそれが我等の全身を占領し、やがて狂熱の形に變る。そして、嵐の中のリヤ王のやうな狂暴に移つた後で、それがまた靜かな宗教的法悅の境に入り、最後は聖愛の無我郷で曲が結ばれる。

何がかやうな勝利と並ぶことが出来るか。オーステルリッツの戦勝も、この永世の凱歌の前には、はかない一場の夢ではないか。偉大な生の熱愛者！彼の口からは常に喜悅の聲が洩れた。

リヤ王
シエークス
ヤ作の戯曲
オーステル
リッツ
當時のオース
トリアハンガ
リヤにあつた
年、一八〇五
年、ナポレオン
軍が露國聯合
軍を破つた地

不幸が彼の命を奪はうとしたその日でさへ、お、かうも美しい人生よ。」と。また、「私は千たび繰返して私の生を住みたいと思ふ。」と。苦しむものよ、苦しむ力のあるものよ。汝のためには、この偉人の一生ほど好い慰安と刺戟はない。彼は自分が悲惨の頂點にゐる時でさへ、彼の實例が後世の苦しむもののために助になることを望んだ。そして、かういつた。「憐むべき忍苦者は己と同じやうな一人の人間——あらゆる自然の障害にもかゝらず、男らしい男になるために、その全力を盡した一人の人間——をこゝに見出して、慰安を感ずるであらう。」と。(嵐の前)

一 朗 詠

秋 興

大抵四時心總苦。就中腸斷是秋天。

(白居易)

白居易
號は樂天、支那唐代の詩人



入江の月

藤原義孝
天延二年(三三
六)歿、年九十

源順
文人、永觀元
年(二六三)歿、
年七十三

秋はなほ夕まぐれこそたゞならね、

秋のうはかぜ秋のしたつゆ。(藤原義孝)

八月十五夜

三五夜中新月色。二千里外故人心。(白居易)

水の面に照る月なみを数ふれば、

今宵ぞ秋のもなかなりける。(源順)

三五夜中新月色二千里外故人心
みればたもたてさうまなみそうそ
ゆれそよひ雨ふれもさうゆれさう

和漢朗詠集

劉元叔
名は敬和、字
は平叔、支那
唐代の詩人

紀貫之
歌人の古今和
歌集の撰者、
天慶九年(西
暦九〇六年)六
十五歳没

大江朝綱
儒者、能書家、
村上天皇に仕
へた、天徳元
年(西暦七二
二年)七十七歳
没、橘直幹
儒者、冷泉天
皇に仕へた

大西祝
岡山縣の人、
哲學者、京都
帝國大學教授、
明治三十二年
三月二十六日
没

擣衣

北斗星前横旅雁。南樓月下擣寒衣。
唐衣うつこゑ聞けば月清み、
まだ寝ぬ人を空に知るかな。(紀貫之)

餞別

前途程遠。馳思於雁山之暮雲。
後會期遙。霽纓於鴻臚之曉淚。
思ひやる心ばかりはさはらじを、
何へだつらん峯の白雲。(橘直幹)

二 俚諺論

〔羅馬〕
ローマの一詩人がエヒピグラムを蜜蜂に譬へて、
大西祝
祝
整あり、蜜あり、軀
Epigram
Roma

エヒピグラム
警句

は小さし。と言へるは、凡べての俚諺にとは言ひがたきも、其の最も
巧妙なるものには恰當せる語なるべし。俚諺の上乗なるものは
多くは此の三者を具ふ。言短くして意義味ふべく、寸鐵人を刺す
の妙あり。
人口に膾炙し易からんことを求むる故に、俚諺は自ら律語をな
す傾あり。我が國語にては、五または七がおのづからなる律呂な
れば、我が國の俚諺には此の律に従へるもの甚だ多し。雉子も鳴
かずば打たれまい。心の鬼が身を責める。といふ如く、最もよく人口
に膾炙せるものにして七五の調子をなせるはいと多し。人と屏
風は、すぐには立たぬ。思ふ念力岩をも徹す。身を捨ててこそ浮む瀬
もあれ。などは、七七の調子をなして語呂頗るよし。十で神童十五
で才子、二十過ぎてはたゞの人。といふも其の語に律あり。右と同
じ理由により、同語または同音を重ねたる類のものも多し。例へ

不レ言
イハシキチヲシヤ
岩氏長者
老照前
河内
禁野
禁野
禁野
ものさし
矢の長良の人柱
織子もちのあは

一二 俚諺論

清流に美佳もず

韓、李廣、
大馬厚吾、何のその名をも通す
しわう子

場遇

〇



大西祝

ば「多勢に無勢」「短氣は損氣」「弱り目に祟り目」「處變れば品變る」「藥九層倍」「勝つて兜の緒を締めよ」といふが如し。かく律をなし、尾韻または頭音を合すること詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象語少く、多くは具體的に言做して、感動の強からんことを求め、また之が爲に屢々誇張の言を喜ぶなど、其の詩歌に似たる點なり。此の故に、諺にて物の度量をいふには、其の數または量を定めていふを好む。「七たび捜して人を疑へ」「人の噂も七十五日」預り物は半分の主などの類は、數ふる

に違ならず。數の中にて最も好んで用ひらるゝは三の數なるべし。「三度目が定の目」「三年たてば三つになる」「懺悔話をすれば三年の罪が滅びる」「三人よれば文殊の智慧」「三人よれば人中」「朝起は三

は、多勢に無勢。短氣は損氣。弱り目に祟り目。處變れば品變る。藥九層倍。勝つて兜の緒を締めよ。といふが如し。かく律をなし、尾韻または頭音を合すること詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象語少く、多くは具體的に言做して、感動の強からんことを求め、また之が爲に屢々誇張の言を喜ぶなど、其の詩歌に似たる點なり。此の故に、諺にて物の度量をいふには、其の數または量を定めていふを好む。七たび捜して人を疑へ。人の噂も七十五日。預り物は半分の主などの類は、數ふる

パラドックス 逆説

文の徳。其の他なほ多かるべし。また用心は臆病にせよ。黒犬にくはれて灰の和滓に恐れる。などは、誇張して言ふによりて其の意味を成せるものの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見誠しやかならぬ語句、即ちパラドックスを用ふるを喜ぶ。此の種の諺に深く味ふべきもの少からず。「急がば廻れ」「言はぬは言ふに勝る」「逢ふは別れの始」「兄弟は他人の始まり」「論語讀みの論語知らず」「人を使ふは使はれる」など、其の例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に却つて相通ずる所あるを發見するは深邃なる智慧の一特徴なり。

パラドックスといふにはあらずとも、總じて反對のものを相並ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。「骨折損の草臥儲」「聞いて

大西祝

極樂見て地獄」「問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥」「長

者の万燈より貧者の一燈のちかちかなど、其の例なり。

反對を並ぶるのみならず、總じて二種の事柄を相並べてそれを比照するは、俚諺の一大特色なり。これ俚諺の比喻に富める所以にして、其の比喻の極めて妙なる詩人の作としても恥かしからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは多く此の類にあり。今思ひ出づるに隨うて、其の三四の例を掲げん。「馬には乗りて見よ、人には添たすうて見よ。」旅は道づれ世はなさなけ」といふが如きは、幾たび唱するも其の趣味の津々たるを覺ゆ。「花は櫻木人は武士。」これ我が國民の以ていそが理想を誇るに足るものの一なるべし。「佛法と藁屋の雨は出でて聞け。」風流の心に富める國民ならで、誰か之をえ言出でん。これを口ずさみ見よ、いかにも詩心道心宗教心の相結びてなせる高雅幽玄なる妙趣の浮び來らん。

かく二つの事を並べ出でて相比照することなく、唯普通の暗喩くらみ

を用ひたるものも頗る多し。例へば、商賣は牛の涎よだめ、祕事は睫まぶた、といふが如し。而して更に其の喩のみを掲げて他の意味を匂はせたるものも其の數多かるべし。「蟹は甲かぶらに似せて穴を掘る。」目糞、鼻糞を嗤わらふ」といふが如きは此の例なり。

かく比喻の用ひ方には數種あれど、その之を用ふるは、寓言に於ける用ひ方とは同じからず。「目糞、鼻糞を嗤ふ」といふが如きは、多少寓言に近寄れる所あるが如く思はるれど、俚諺と寓言とは、後者は敘事物語の體裁を具へ、前者は然らざる點に於て、全く相異なり。同じく意を寓して比喻を用ふるも、寓言はこれを出來事または動作として語り、俚言は時間に結ばずして、唯常恆つねづねの事實として語るなり。(大西博士全集)

自修文

一三 追憶と旅愁

一 追憶

激しい吹降りの夜だった。電線の唸り聲、硝子障子の騒々しい音、時々電燈がぴかり／＼と瞬をする。Kは生盪くなつた盞茶をぐいと飲むと、思ひ出したやうに斯う言つた。

「僕は、こんな夜には、きつと、あの君と富士山で暴風雨に遭つた時のことを思ひ出すよ。」

さう言はれて見ると、今まで何氣なしにゐた僕も、當時の追憶に引入れられずには居られなかつた。僕の眼前には、其の時の——それは、もう三年前のことだが——光景があり／＼と浮んで來た。

○
何だか足が冷たい、血が出て居るんぢやないか知ら。——半ば夢、半ば現の中に、斯う思ふとはつと眼が覺めた。たゞぼんやりと、あ

あ今俺は富士山の石室いしむろに居るんだな。」と思つて、枕許の懷中時計を見ると、眞夜中の二時。戸外にびゆうど、どと吼ほえる風雨の凄じさ。風は砂利を飛ばして、雨とともに、はち／＼と石室の戸にぶつかる。その度に、淡暗いランプLampの光を寂しく震はせる。

何だか足が冷たくて、氣持が悪い。——今度ははつきり意識される。跳ね起きて見ると、どつと降りつける礫つそのやうな雨が戸の破れ目から入つて、蒲團の裾がびつしより濡れて居る。

「やっ！」

「何だ？ どうした？」

傍に寝てゐたKが驚いて斯う叫んだ。

「俺の蒲團がびつしよりなんだ。」

「俺のもずぶ／＼だ。到頭暴風雨になつたね。」

「困つたことになつた。眠られたか。」

「なに、もう一時間も前から眼が覺めて居る。」
石室は避難者で一杯だった。誰も眠られないと見えて、みんな青
白い顔をして、明日を氣遣つて居る。

山の怒！ 僕は到頭眠られなかつた。

○

長い不安の一夜は明けたが、暴風雨はまだ止まない。

「駄目だ！」

絲經
經を麻絲、緯
を藁で織つた
席

僕は絶望と恐怖とのために斯う叫ばないでは居られなかつたが、
Kはどうしても頂上まで登ると言ふので、それではと、絲經と笠を
引被つて、遂に石室を出た。

一步戶外に踏出すともう僕等の體は安定を失ふやうな氣がし
た。あたりは全く綿のやうな白雲に鎖されて、二三步前を行くK
の姿さへ見失ひさうだ。荒狂ふ風はあらゆるものを破壊するか

のやうに、下から上へと吹上げて来る。毒矢のやうな雨は異様な
響を立てて強く僕等の顔を打つ。

五六間行つた時、笠が吹飛ばされた。更に三四間登つた時、絲經
がもぎとられた。僕等はもう風雨の爲すがまゝに任せるより外
はなかつたが、それでも心に或緊張を失はなかつた。

事實をいふと、僕等は石室を出るまでは、一種の恐怖で震へてゐ
た。其の時、心は恐しい想像や暗い不安で一杯だったが、一步この
狂亂と咆哮ほえとの中に踏込んだ時、恐怖も不安も跡方なく消去つて
しまつた。消防夫は一度火中に飛込んだが最後、纏まとを振るといふ
こと以外に何も考へないさうだ。丁度それと同じやうに、其の時
の僕等は、たゞ登るといふこと以外には何も思はなかつた。

七合目、八合目、九合目、僕等は無我夢中で登つたが、雨と風とは少
しも其の鋒先を和げなかつた。雨は容赦なく、上衣からシャツ、シ

Shirts

咆哮
ほえたけ
ること

ヤツから皮膚へと透つて、全身は血も凍りつくやうに寒い。

「大丈夫か？」

「大丈夫だ！」

足を風にすくはれて、轉げさうになつたり、手が感覺を失つて、金剛杖を落したりしながらも、僕等は專念登るより外仕方がなかつた。

「おい！」

僕は時々立止まつてKを呼んで見た。

「おい！」

雲の中で返事があると、また登つた。其の時の僕等には、既に生も死もなかつた。「登る」といふことそれだけが僕等の心の全部であり、一本の金剛杖それだけが僕等の力の全部だつた。

僕が我を忘れてこんな追憶に耽つてゐた時、Kは又話しかけた。

無手法
無法

「それでも、あの時分だつたから、あんな冒険も出来たんだ。」

「それはさうさ。今なら、あんな無手法な真似が出来るもんか。」

「ほんたうだよ。登る時は随分苦しかつたが、頂上で、熱い甘酒を飲んだ時は嬉しかつたね。」

「あの時は、實際征服者の心持だつたよ。甘酒だつて、あんな黒い色をしたのなんか、普通の時なら飲めはしないんだが。」

戸外にはやはり當時を思はせるやうな風雨が激しかつた。僕等は其の音を聞いて居ると、當時のことが思ひ出されて、全身の筋肉がびり／＼と動くやうな氣がした。(大口生)

二 旅 愁

南國に育つた私には、當地の冬が恨めしい。紅葉が散つて鉛色の冬が訪れると、骨の中まで鉛色になるやうな氣がして、餘り肥

えてゐない私の身體は、臺所の鯉節のやうに日に／＼瘦せる。私は此處へ來て始めて故郷の暖いことと母親の有難味とを知つた。故郷なんか寒いといつても池の水の凍るやうなことは先づない。それに黄金色の蜜柑が花のやうに實る。それでも冬が來ると青臭い菜の花を嗅ぐ時節が戀しかつた。

冬嫌ひの私を一層冬嫌ひにしたのは、冬が私の幼友達の謙ちやんを奪つたからだ。肺を病んでゐた彼が、蒼白い瘦細つた顔の中から、澄んだ瞳にいくらか希望を輝かして、「この冬さへ越せばね、どうにかなるんだよ。」と言つたのがまだ耳に残つて居る。ことりと音のしない八疊に、鐵瓶だけがちん／＼鳴つてゐた。その日は鉛色の日だつた。

私が昨日讀んだ詩集に、藤村の「春は來ぬ、春は來ぬ。」といふのがあつて、その中に、「蘆の枯葉を洗ひ去れ。」といふ句を見出した時、大嫌ひ

藤村
島崎春樹
野縣の人、
治野五年生、
學者

な冬を小氣味よくぶんなぐつたやうな氣がした。もう二月の初だ。當地の酷い寒さも長いことはあるまい。早く青臭い菜の花を嗅ぎたい。さうして、無事に試験を終へて故郷の母に逢ひたい。(高橋生)

一四 登山と修養

小島 烏水

天は或時代を限りて、我等人間に特殊の快樂を賦與す。青年の運動・遊戯に於けるはその特權の一なりとす。

人各嗜好あり。端艇の競漕をなすも可なり。球戯を闘はすも亦ただ可なり。然れども、その識を收むるの廣狭、學に資するの大小の上より考ふれ



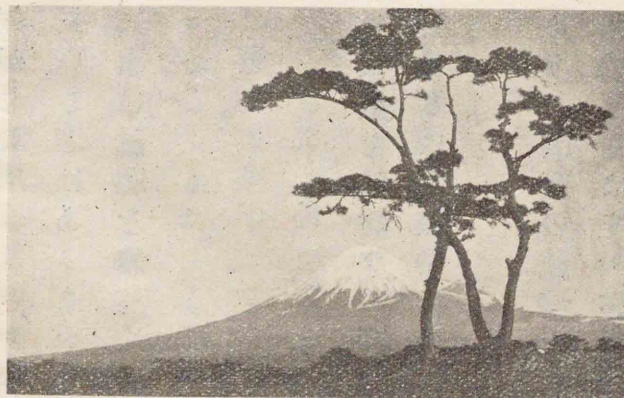
サンベス

小島烏水
名は久太、
川縣の人、
治八年生、
岳研究家、
濱正金銀行員

ば、此等諸遊戯は、旅行特に登山に及ばざること甚だ遠しといはざるべからず。

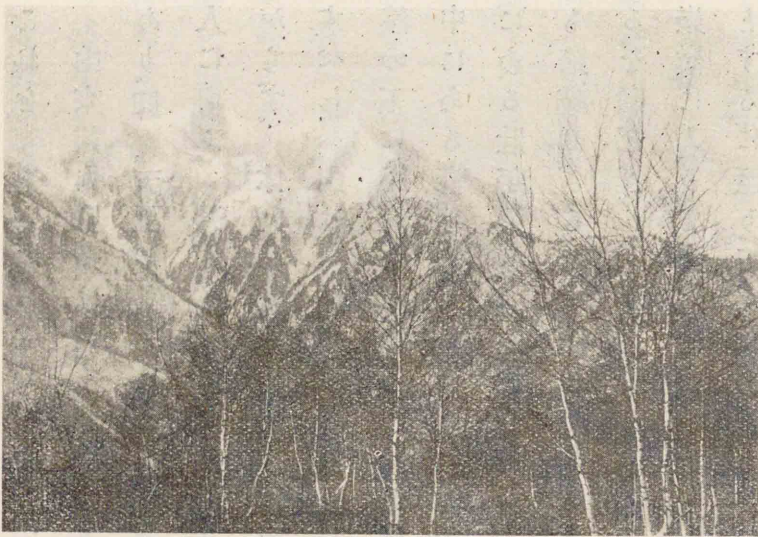
昔、春秋の世に、魯國日に事なきを尙ぶ。太公、魯の前途を卜して曰く、後世漸く弱からん」と。今や我が國の青年、その勤勉なるものは、暗窓に危坐して、額を簿書堆裏に没し、面色鬱々として生氣なく、その惰弱なるものは、骨牌を弄び、粉黛を事とし、殆ど丈夫の籍に入らず。太公をしてこれを視しめば、そも何とかいはん。若しそれ粗野慥悍、街頭に狗吠猿々の狂態をなし、以て書生の元氣を誇るに至りては、愈、出でて

太公
太公望をいふ、姓は呂、名は尙、周の文王の師



富士山

スペンサー
英國の哲學者
(1820—1903)

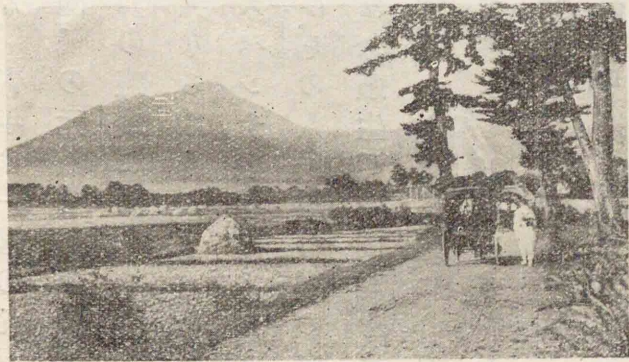


日本アルプス (祖が岳)

愈、下る。青年は一國の元氣なり。國民の元氣の消長は、國家の勢力の盛衰に關すること極めて大なるは、固より言を俟たず。スペンサー嘗てアメリカ(亞米利加)に遊び、その人民が行樂の中にもなほ念頭生活の問題を忘れず、居常快々として遂に心を縦にして遊ぶこと能はざるを見て、米國の前途を弔し、勸むるに英人の能く働き能く遊ぶの態度を學ばんことを以てしたりき。哲人の言、邦人また聽いて

これを容るゝに吝なるべからず。

由來邦人の憂は能く遊ばざるにあり、遊んで善遊を選ばざるにあり。抑、天夏の季を作りて休養の日を人に與ふ。乃ち休養の途を圖らざるべからず。休養は宜しく自然の中に於てすべし。山は自然の王なり。自在に自然の王に咫尺し得るものは、筋骨の發達中にある青年、若しくはその發達の頂上にある壯年のみ。富嶽の如き古來何人も踏破せざるなき山は、白髮の人なほ登るを難ぜざれども、信飛加越境上の如き崇嶺に入りて、造化千古の大祕を探らんとするに至りては、頽齡の人それ之を能



山 島 霧

くせんや。

或は沙石面を撲つことあり、或は累々たる氷雪の割裂縫合せる處を匍匐することあり、或は森林に彷徨して蛇尾を踏むことあり。何人も冒険なくして山遊すること能はず。即ち他日大事業を成就すべき潑刺たる英氣のこの間に涵養せらるゝもの蓋し少からざるなり。外人のアルプス〔阿爾伯〕に登るもの、年々死傷者を出して悔いざるもの、實にこれがためならずんばあらず。

我が國の山は一万二千尺の富士山を内地第一となす。その深さ、高さ、大いさを世界の諸高山に比すれば、眞に兒孫に等しきのみ。適、我が國の諸高山を跋涉して、冒険といひ、探検といふ、寧ろ滑稽事に屬す。然れども、有るは無きに勝る。余は益、その所謂冒険、探検の盛ならんことを渴望して已まざるなり。故、理學博士關谷清景氏が磐梯山破裂の報を得るや、友人の切諫

關谷清景、岐阜縣の人、
地質學者、東京帝國大學教授、
明治二十九年四月十二日歿。
磐梯山破裂、明治二十一年七月、
磐梯山は福島縣にある。

熊本の大地震
明治二十二年
七月
霧島山
宮崎・鹿児島
兩縣の境にあ
る

をも聴かずして登山し、以て帝國大學紀要に光彩ある文字を寄與したる如き、また嘗て熊本の大地震の際に、死を決し擔架を命じて霧島山に登りたるが如き、その學に貢獻する意氣の切なる、眞に懦夫をして起たしむるものあるにあらずや。



ス ブ ン ロ コ

余嘗て三月初旬、風雪を衝いて箱根山中を出で、薄暮御殿場に到りて一旅舎に草鞋を解きしことあり。偶、一外人の、爐邊に厚き毛皮の外套を蒙り、雪靴を穿ち、椅子に倚りて地圖を按じつつ、通辯と談ぜるを見る。剛力二人傍に侍せり。舎主余に語つて曰く、明朝富士山嶺を窮めんとして弊館に來り投ぜらる。通辯を介してその無謀の擧なるを切諫すれども、斷乎として肯ぜられず」と。余もその行を壯とし、而も心竊に

之を危みぬ。

兩三日の後、静岡市の一新聞紙は、かの外人が、寒冽の候、登山を敢行したる狀を詳報せり。余は覺えず抵掌、快を叫びぬ。世或は之を以て單に一好奇心に過ぎずと議するものあらん。あゝ、好奇心か。コロンブスが絶海の大陸に航せしも、スタンレーが荒漠不拓のアフリカに入りしも、博士ナンセンが北極の氷洋に遠征を試みしも、即ち或意味に於ける好奇心の、大用にあらずや。たゞそれ庸人にありては、漫然として好奇心なり。傑人にありては、その好奇心は大なる確信の上に立つ。余はこの意味に於て好奇心を絶愛す。而して世の青年諸子に向つて、特に山を對境としてその冒險の氣象を砥礪せんことを切望す。(日本山水論)

一五 山頂の空

楨 有 恆

楨有恆
仙臺市の人、
明治二十七年
生、登山家

コロンブス
イタリーの航
海家、アメリ
カの發見者
(1481-1506)
スタンレー
英國のアフリ
カ探検家(1844
-1904)
ナンセン
ノルウェーの
博物學者、北
極探検家(1861
-1930)

山嶽は一つの大きな藝術品だ。譬へば、それは一つの大管絃樂を聴くやうな思がする。一個々のメロデーが集つて大きなハーモニーHarmonyが作られるやうなものだ。全體として見ても、部分部Melody分として見ても、みんな纏まつた美しさと魅力とを持つてゐる。

平原から山へはいると初は森林帯だ。そこには、色彩と、靜かな呼吸と、囀る駒鳥の啼く音とが躍つてゐる。そして、溪流は歡喜に狂つて自由を歌つてゐる。それは全く異なつた立派な王國を見るやうだ。唐檜やカستاニヤの森、そして、その間を綴る白銀の樺斜陽を浴びては微睡まどむやうに二葉の緑が燃える。森林の道は甘い朽葉の香がする。暗い森を越えろと灌木帯になる。そこには、長い間の雪のために根元から曲つた灌木が、燃えるやうな新緑に若やいで伸びようとしてゐる。もう此處まで來ると道の跡はなくなる。灌木帯を過ぎると、日本アルプスなら山稜近くだ。風が

アルペン
アルプス



高山のお花畑

強く吹荒れて、氣温は低い。植物は丈の低い草木の類だけだ。そこには、お花畑もある、清い殘雪もある。植物は丈の低い草木の類だけだ。そこには、お花畑もある、清い殘雪もある。更に高く永遠の雪と斷崖Alpenとだけ

の死の王國が聳立してゐる。山嶽登攀者は四季の氣節を同時に見る。平原は夏で、山麓の森林に入ると既に酷暑が消える。少し登ると春がある。その上にはまだ冬が躊躇ためらつてゐる。そして、その處々で、その氣節にふさはしい植物や動物や鳥類や昆虫類が見られる。或谷間には、櫻が今を盛りと咲いてゐたり、雪の消え間に岩かゞみが咲い

てゐたりする。消残つた雪を踏みしめながら雪溪を渡る冷かな風に吹かれると、懶さが忽ち一掃されてしまふ。

山は美しい。その山の美しさは、この凡べてを蔽ふ深い空の色によつて、惠深く抱かれてゐる。美しい山頂の空！それは下界の何處にも見られない美しさだ。その美しさはたゞ山頂を極めたものだけが知る美しさだ。何故かといふに、あの山頂の空の美しさは寫眞にも現れないからだ、或種類の高山植物のやうに下界には持つて來られないからだ。それは、幾日もの汗を流して漸く究極の山頂に立つた時、そこに始めて見られるたつた一つの色彩だ。實際その色彩はむしろ黒いといつてもいゝほど深い紺青をしてゐる。それは空氣が稀薄なために起る現象だが、晴れた日に、山稜に登つて、殘雪を踏んで、その紺青の空を振仰ぐと、無限の深さ

を感じないではゐられない。鈍い霞んだ色ではなくて、透明な底の知れないやうな靜かな色だ。この紺青の空を背景にして聳えてゐる、堅い鋭い峯または可憐な色の花は、その空の色としつくり調和する。アルペンの高嶺に咲く龍膽りんだんこそは、恐らくあの高山の空の色を映すもの一つだらう。

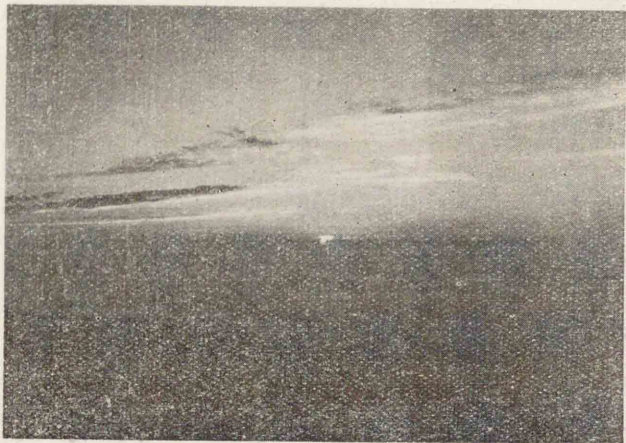
山頂に立つて青空を仰ぐと、輝く日の光は針のやうに顫へてゐるかのやうに思はれる。しかし、午後になると、信州あたりの高山には霧が這上つて來る。谷から山稜へ這上つて來て吹抜けようとする。そこに反對の方から風が吹いて來ると、その風に吹きまわされて、霧は悶えるやうに追返される。岩と岩との間を出よう出ようとして捲返る。かうして三時となり四時となつて行く内に、我々は、その霧の中で、或は小屋があつたらその小屋にはいるとか、

或は露營の天幕を張るとかして、日の暮れるのを待つ。それは万尺の山頂の冷氣に生をかくまふさゝやかな憩だ。

小さな火、簡単な食物、身には冬物を纏うてゐる。霧が飄々として過ぎる。やがて夜が来る。霧はすつかり消えて、空は非常によく晴渡る。山頂で見る夜の空のやうに深い空は、平原では迎も見られない。それは深く、深く、飽くまでも氷りついたやうな深さだ、筆舌を絶した現象だ。見てゐると、微睡むやうな甘い氣持になつて、人の世の流轉を超越する。



(目人二らか左) 恆有横の姿山登



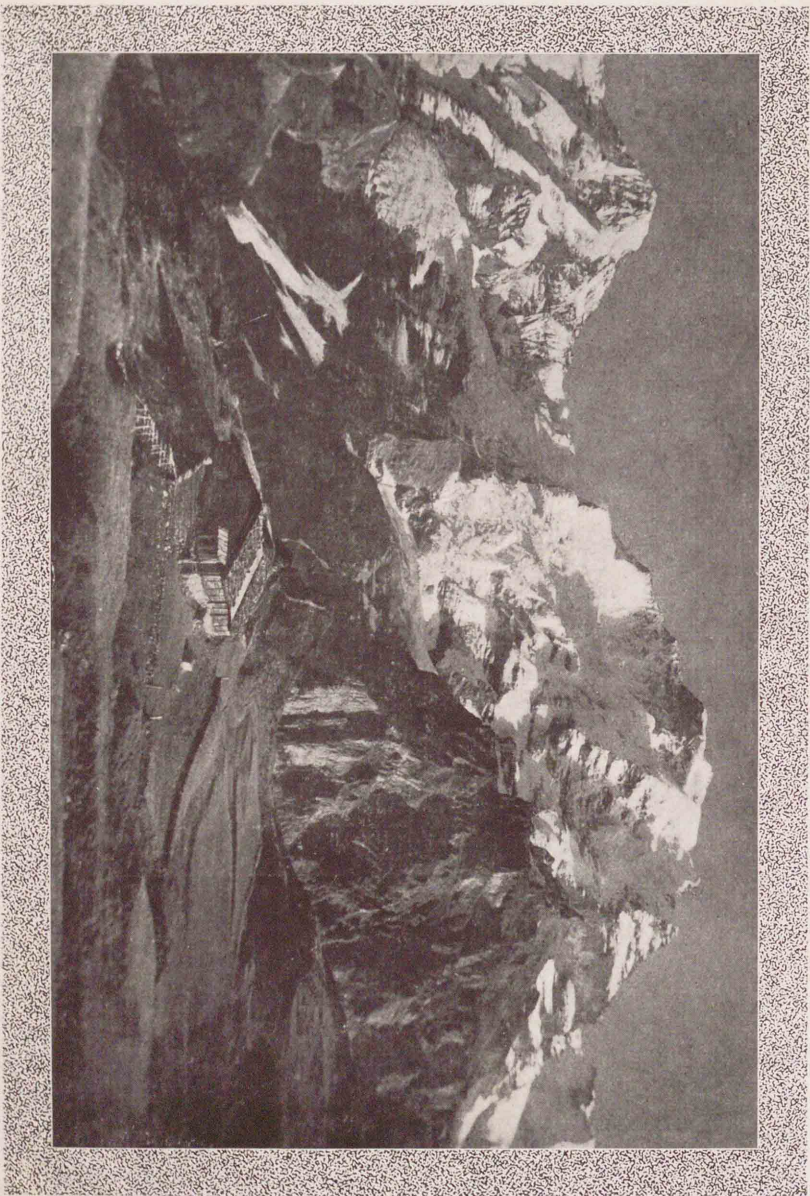
御 來 迎

その時に、我々はまた平原では迎も見られない月を見る。山頂の月は平原の月より後光が割合に少い。少いといふよりは、後光がないかのやうに、月は白光に氷つた色をしてゐる。そして、平原に於てよりは小さく見える。小さな白光が虚空に氷りついてゐるとでもいはうか。その神祕な月の姿は、山頂でなければ見られない。月の光が山頂の残雪に青く降りそゞぐ時、我々は全く地上を忘れてしまふ。若しそれがアルペンであるなら、氷河や鋭い峯に懸つてゐる氷雪の面に煌々と光る。その輝き

は何十哩の遠い山々さへも指顧の間にあるかのやうに明に照らす。アルペンの氷と雪とに埋る四千〔米突〕メートルの山稜に立つて白光を仰ぐ時には、我々は正しく神の國に彷徨ふ至純の人と化してしまふ。

山頂の露營は寒い、寒くて眠られない。それで焚火をする。全く始めての登山者はどうしても眠られない。特に三時頃からは寒さが一層加はる。しかし、丁度その時分から、紅と黄との微光が漂つて来る。それは誰でもよくいふ御來迎で、あの山上の日の出の前觸である。

日が出ると空氣はだん／＼暖くなる。そして、雲霧がむく／＼と湧立つて、山の裾を這上つてかたまり、下界を一面に埋めてしまふ。その雲の海の彼方此方に、山の頂がさながら島のやうに現れる。誰でも知つてゐるやうに、雲の裾は平かである。しかし、山の



(カラフケユ) 嶺峻のスタイル

アルプスは歐洲の南西部に連亘する雄大な山脈である。地積は實に一五〇〇〇方里を占め、東西三八〇里、南北七〇里に及び、佛・獨・奧・伊・瑞の五個國の間に介在する。

こゝに掲げたユングフラウ (Jungfrau) は、スイスの南部を走るベルン・アルプス (Bernese Alps) の最高峯で、高さ一三六七〇尺に及び、山谷が優美である上に四時白雪に蔽はれてゐる。西曆一八一一年以來登山する者が多く、今は電氣鐵道の便とく備はつてゐる。

マッターホルン
の一名山
アルペン
ロンバルデー
のイタリーの
平原

上から下に見る雲は突兀としてゐる。その突兀とした雲の背が入亂れて動く時には、恰も羊の群が歩くやうで、一大奇觀を呈する。アルペンでは、〔伊太利〕イタリーに面する高山から、いつでもこの雲海が見られる。それは暖い國だからだ。〔瑞西〕マッターホルンの山頂に立つた時だつた。北側のスウイスは清朗限のない透徹さなのに、一方の南のイタリー、そこは〔瑞西〕ロンバルデーの曠野だが、一面の雲海だつた。〔瑞西〕ロンバルデーの曠野だが、一面の雲海

山は雲の創作者だ。靜かな大空の日和に肩を怒らして立つ山嶽は、また空の平和の攪亂者だ。

山頂の空の今一つの驚異は、天候の荒れる光景だ。雲群が山嶽に當つて叫喚するところは、實に壯觀極まりがない。しかし、夕暮になると、黄色に輝いて、氷雪の山に惱んで漂ふ。さながら憧れの

思の色と音楽とのやうだ。
山頂の空、それは永久の神祕だ。その神祕を窺ひにだけでも山
に行くべきだ。

一六 義士討入の綱領

福本日南

月日の過ぎるのは電光の如く、はや十二月となつた。今は上野
介が所在をだに確めれば、直ちに討入るばかりである。内藏助は
此の月二日を以て、一黨の同志を悉く深川八幡前の一旗亭に召し

武士の矢並つ
うくろふ小手の
たばしる原那須
のし

大石良雄筆蹟
た。亭主への觸込は、頼母
子講の取立に就いて初會
を開くといふのであるか
ら、何人も之を疑はぬが、其
の實は、去年以來金鐵の士

福本日南
名は誠、福
縣の人、新
記者、大正
五年、年六
元祿十五年
十二月
上野介
吉良義央
内藏助
大石良雄

吉田忠左衛
門
名は兼亮

冷光院
淺野長矩

と見えた同盟中、江戸到着以來、又々數名の背盟者を出したので、一
つには今一回神文の上に血を濺いで、一層同志の精神を鞏め、又一
つには軍令を一般に頒つて、討入の約束を定めようがためである。
聽て其の軍令は吉田忠左衛門の手に由つて二様に起草された。
其の一は、一黨討入の綱領ともいふべきもので、起請文前書として、
人々の名を署し、血を濺ぐべき所謂連判牒の神文の冒頭に記載さ
れたのである。これは最も此の綱領を神聖にし、同志の頭腦に印
象させて、一人の違背者をも出さまいとの用意である。其の文は
左の通りである。

起請文前書之事

一、冷光院様御尊離吉良上野介殿可討取志有之侍共申合候處、及
此節、大臆病者共變心退散仕候者選捨、唯今申合必死相極候面
面者、御靈魂可被遊御照覽候事。

一、上野介殿御屋敷へ押込働之儀、功之淺深不可有之候。上野介殿印揚候者も、警固一通之者も、可爲同然候。然者、組合働役好事申間敷候。尤も先後之爭不可致候。一味合體如何様之働に相當り候共、少しも難澁申間敷事。

一、一味之各、存寄被申出候共、自己之意趣、申妨候儀有之間敷候。誰にても理の當然に可申合候。豫而不快之底意有之候共、働之節互に助合ひ、急を見繼ぎ、勝利の全き所を専らに可相働事。

一、上野介殿十分に討取候共、銘々一命可遁覺悟無之上者、一同に申合せ、散々に罷成申間敷候。手負之者於有之者、互に引懸け助合ひ、其の場へ集り可申事。

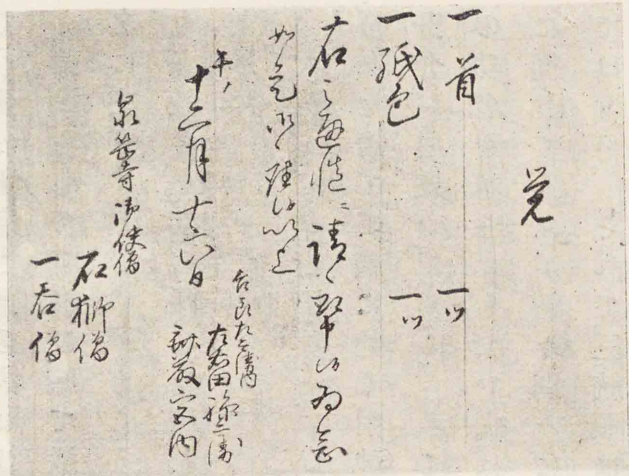
右四個條相背き候はば、一大事成就不可仕候。然者此度退散之大臆病者と可爲同然事。

として、其の後に神文は記された。此の案の起草に參與したるもの

原惣右衛門
名は元辰（もととき）

は、吉田忠左衛門の外には、原惣右衛門一人であつた。脱稿した案文は内藏助の前に提出された。内藏助はつらく、其の案文を看て、自分の所存も此の外に出でぬ。残るところもなう物せられた。と、莞爾として打喜び、聽て嚴かに之を衆に宣示した。一黨中誰か之に支吾するものがあらう。内藏助を一卷の筆頭として、我も我もと姓名を其の後に自署し、血判を据ゑて、こゝに最後の神盟は成立した。

大石といひ、吉田、原といひ、流石に兵家は兵家である。義徒の一黨身を捨てて義に赴く精神は誰彼の區別なく同一で、目ざすは上野介が白髪首である。我こそ我が手に其の首級を揚げ、當場第一の功名を専らにしたいとは、勿論人情の常である。若し此の希望に従つて人々が個々別々に行動すれば、軍紀も節制もあつたものではない。それで、三統領は先づ之を慮り、上野介が首級を揚げる



首 請 取 證

一首	一ツ
一紙包	一ツ
右之通體ニ請取申候、爲念如是御座候、以上	
午ノ十二月十六日	
吉良左兵衛内	
左右田孫	
兵衛	
齋藤宮内	
泉岳寺御使僧	
石獅僧	
一吞僧	

の意見を有してゐても、私情に於ては往々相容れぬもののあることは、是亦人情の免れぬ所である。義徒の中にも各種の人士があ

者も、警備に一身を委ねる者も、其の功に厚薄のないことを約して、豫め一黨を打つて一團一體となし、敵を破るも一黨これを破り、讎を獲るも一黨これを獲ることとし、任務の好悪や前後の争を杜絶したのである。獨りこればかりではない、公義に於ては同一

小野寺十内
名は秀和
寺井玄溪
赤穂藩の醫
官、正徳元年
(1718)歿

カール十二
世
(1682-1718)
ホルタワ
當時のロシア
の都府、モスク
ワの西南にあ
る

る。其の一端は、小野寺十内が寺井玄溪に與へて一黨の人物を品隲した評論によつても察しられる。三統領は夙に之を透見してゐた。それで、自己の底意を含まず、理の當然に従つて、一に公義に徇ひ、戦友互に相助け、要は全局の勝利を期すべき旨を各人に覺悟させた上、見事目的を達して、總引揚げに引揚げる際まで、整々として一致の進退を失はぬやう、同志を約束の裏に收め入れた。

以上は軍令の精神であるが、三統領は尙一黨の志氣名節を鼓舞するため、冒頭に、冷光院様の御靈魂も御照覽遊ばさるべし。』といつて、亡君臨終の鬱憤を回顧させ、最後に、此の約束に違背する者は背盟逃脱の大臆病者と同然たるべし。』と辱めた。用意の周到、思慮の縝密、唯々感歎の外はない。

これに就いて想ひ起すのは、スウェーデンの英主カール十二世が乾坤の一擲を賭したポルタワの血戦である。極西にあつて極

不識庵
上杉謙信

機山

武田信玄

ペートル大帝
(1672-1725)

ロシアの皇帝

東の大石等と恰も其の時代を同じうした北歐の不識庵とも稱す
べき彼カール十二世が、スカンデナヴィヤ半島から崛起して天下
を力征し、東歐の機山とも謂ふべきペートル大帝を追うて、追
捲り、モスクワの小天地にまで追込んだが、天か命か、大雪のために
後軍が續かず、糧道が絶え、ペートルの大軍に取圍まれたポルタワ
の血戦は、万に一捷さへ期するこ
との出来ぬ大王最後の悪戦であ
つた。吁、この一戦は既に万に一
捷さへ期することの出来ぬ悪戦



カール十二世

ナルワ
當時のロシア
の都會

である。而も大王は親しく陣頭に臨み、當年精騎八千を以て老黠
ペートルが八万の大軍を一舉に蹴破つたナルワの戦捷を宣示し
て、爾等は未曾有のナルワ戦に打勝つて、世界に知られた名譽の武



ペートル大帝

夫ぞ。此の期に臨んで、人々個々一步も敵におくれを取つて、終生
の名譽を傷ふな。」と勵ました。事
に大小の別こそあれ、内藏助等が
こゝに先君の鬱憤を繰返し、名譽
の討入を奨励したのと、其の意は
同一である。英雄の觀るところ
は東西その節を合するが如しで
ある。自分が感歎極まつて之を激賞するのも亦決して偶然では
あるまい。(元祿快學錄)

一七 近代の和歌

尾山篤二郎

葉と葉ふれ葉と葉すれあひ葉と葉ゆるゝ、

尾上篤二郎
金澤市の人、
明治二十二年
生、歌人

茶のはなのこ
ぼれて白き道
をきぬかたへ
の藪は去來の
やぶなり
篤二郎



蹟筆 篤二郎

眺めてあるにさびしきは木よ。

ひそまりて動くともなき木を見れば、

やがておのゝ動くなりけり。

岩山の岩しみいづる水にひたり、

虎耳草^{ゆきのしたぐさ}生ひしげりたり。

中村憲吉

中村憲吉
廣島縣の人、
明治二十二年
生、歌人、大
阪毎日新聞社
員

宵ふけてわが行く野邊を草の家に、

くゝと雞啼くあはれ月夜を。

ひた寂し聞きつゝ居れば松山の

山ひくき島路
をゆけば淡路
びと路に折り
ひもちに出遇
ひ來 憲吉



蹟筆 吉憲

夕海岸に草を刈るかと。

雨ながら昔戸の濱邊に虫鳴けり、

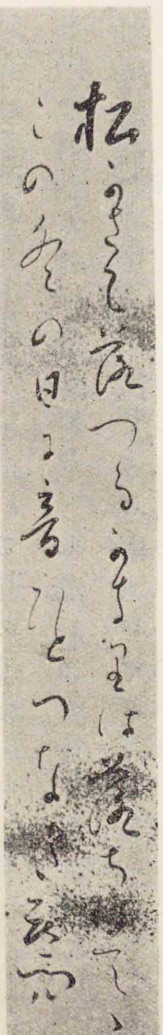
あはれと人に告げやらましを。

吉植庄亮

吉植庄亮
千葉縣の人、
明治十年生、
歌人

若篠のするどく伸びし穎のさきに、

しらたまの露ひとつ光れり。



蹟筆 亮庄

松かさも落つ
るかぎりは落
ちかぎりに
冬はてしこ
とつなき
庄亮

このあした野分に散れる松の葉の
青きがすすし濡石の上に。
松毬も落つるかざりは落ちはてて、

この冬の日に音一つなき。

一八 行く川の流

鴨 長 明

行く川の流は絶えずして、しかも元の水にあらず、よどみに浮ぶ
うたかたはかつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の
中にある人と住家とまたかくの如し。玉敷の都の中に棟を並べ
藁を争へる尊き卑しき人の住居は、代々を経て盡きせぬものなれ
ど、これをまことかと尋ねれば昔ありし家は稀なり。あるは去年
破れて今年造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれ
に同じ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は二三十

鴨長明
鎌倉時代の文
學者建保元
年(六七)歿
年六十三

人が中に僅に一人二人なり。朝に死し夕に生るゝならひ、たゞ水
の泡にぞ似たりける。知らず生れ死ぬる人何方より來りて何方
へ去る。また知らず假の宿り、誰がために心を悩まし、何によりて
か目を悦ばしむる。この主人と住家と無常を争ひ去るさま、いは
ば朝顔の露にことならず。あるは露おちて花のこれり。のこる
といへども朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて露なほ消えず。消
えずといへども夕を待つことなし。

およそ物の心を知りしよりこのかた、四十あまりの春秋をおく
れる間に、世の不可思議を見ることや、たびくになりぬ。去ぬ
る安元三年四月二十八日かとよ、風烈しく吹きて静かならざりし
夜、戌の時ばかり、都の巽より火出で來りて乾に至る。つひには朱
雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜が間に塵灰となりなき。
火元は樋口富小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けりとな

安元三年
即ち治承元年
(一一七三)

ん。吹迷ふ風にとかく移り行くほどに、扇をひろげたるがごとく末廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映りて普



鴨長明 (菊池容齋筆)

く紅なる中に、風に堪へず吹ききられたる焔、飛ぶがごとくにして一二町を越えつゝ、移り行く。その中の人うつゝ、ごころあらんや。或は煙に咽びて斃れ伏し、或は焔にまぐれて忽ちに死しぬ。或はまた纔に身一つ辛くして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍万寶さながら灰燼となり

にき。そのつひえいくそばくぞ。このたび公卿の家十六焼けたり、ましてその外は數を知らず。すべて都の中三分の一に及べりとぞ。男女死ぬるもの數千人、馬牛のたぐひ邊際を知らず。人の營み皆愚かなる中に、さしも危き京中の家を作るとて、寶を費し心を悩ますことは、勝れてあぢきなくぞ侍るべき。

また治承四年卯月二十九日の頃、中御門京極のほどより大いなる辻風起りて、六條わたりまで厳しく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまくるに、その中に籠れる家ども、大きなるも小さきも、一つとして破れざるはなし。さながら平に倒れたるもあり、桁柱ばかり残れるもあり。また門の上を吹きはなちて四五町が外におき、また垣を吹きはらひて隣と一つになせり。況や家の内の寶、數を盡して空に上り、檜皮、葺板の類、冬の木の葉の風に亂るゝがごとし。塵を煙のごとくに吹きたてたれば、すべて目も見えず、夥しく鳴りどよむ音に、物いふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かばかりはとぞ覺ゆる。家の損亡せるのみならず、これを取繕ふ間に、身を害ひてかたはづけるもの數を知らず。この風坤の

方に移り行きて、多くの人の歎をなせり。辻風は常に吹くものなれど、かゝることやはある。たゞごとにあらず、さるべき物のさとしかなどぞ疑ひ侍りし。(方丈記)

一九 古文斷片

およそ王土にはらまれて、忠をいたし命をすつるは人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。しかれども、後の人を勵まし、その跡を憐みて賞せらるゝは君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにあらぬにや。ましてさせる功なくして過分の望をいたすこと、自ら危むるはしなれど、前車の轍を見ることはまことにありがたきならひなりけんかし。(神皇正統記)

雪のおもしろう降りたりし朝、人のがりいふべきことありて、文をやるとして、雪のことは何ともいはずりし返事に、この雪いかゞ見

前車の轍
前車、後車
戒(漢書)

駒引き
逢坂の關の清水に影見えて
今や引くらん
望月の駒(紀貫之、拾遺集)

遊子
遊子猶行ッ於
殘月、函谷雞
鳴(和漢朗詠集)

函谷
支那河南省
蟬丸
平安朝の頃逢坂の關に住んでゐた盲人、琵琶の名手
藁屋
世の中はとてもかくても過してん宮も藁屋もはてしなければ(蟬丸)



北 親 皇 (神皇正統記著者)

ると、一筆のたまはせぬほどのひがく、しからん人の仰せらるゝこと聞きいるべきかは、返すくゝ口惜しき御心なりといひたりしこそをかしかりしか。今は

北 亡き人なれば、かばかりのことも忘れがたし。(徒然草)

東山のほとりなるすみかを出でて、逢坂の關打過ぐるほどに、駒引きわたる望月の頃もやうく、近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかに音づれて、遊子なほ殘月に行きけん函谷の有様思ひ出でらる。むかし、蟬丸といひける世捨人、この關のあたりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を弾きて心をすま

し、和歌を詠じて懷を述べ
けり。嵐の風の烈しきを
侘びつゝぞ過しける。

いにしへの藁屋の
床のあたりまで、心
をとむるあふさか
の關。(東關紀行)

或人いはく、人の君とな

れるものは、拙きものなりとも嫌ふべからず。文にいはいはく、山は小
さき壤をゆづらず、このゆるゑに高きことをなす、海は細き流をいと
はず、このゆるゑに深きことをなすといへり。また明王の人を捨て
たまはぬこと、車を造るたくみの材を餘さざるに喩ふ。曲れるを
も短きをも用ふる心なり。また人の食物を嫌ふことあらば、その



(會圖所名道海東) 丸蟬の關の坂逢

山は云々
太山不レ讓ラ
壤ハ故能成ニ其
大レ河海ハ不レ
擇ニ細流ヲ能
就ニ其深ニハ史
記

身必ず瘦すともあり。總じて大人は賤しきを嫌ふべからずと見
えたり。およそいとほしければとて、謬りて賞をも過さず、にくけ
ればとて、猥りがはしく刑をも加へずして、あまねく均しきめぐみ
を施すべしとなり。(十訓抄)

二〇 元祿調

花の雲鐘は上野か淺草か。 松尾芭蕉
雲雀より上に休らふ峠かな。 同 人

はなのくも鐘
はうへのか鐘
草かばせを

なつたけも
うへのか鐘
草かばせを
芭蕉筆蹟

古池や蛙とびこむ水の音。 同 人
三井寺の門叩かばや今日の月。 同 人

夜も既に明て
水雞の行衛哉
其角

枯枝に鳥の止まりけり秋の暮。
旅に病んで夢は枯野を驅けめぐる。
鶯の身を逆さまに初音かな。

松尾芭蕉
同 人
榎本其角



其角筆蹟

夕涼みよくぞ男に生れける。

同 人

明月や疊の上に松の影。

同 人

梅一輪一輪ほどの暖かさ。

服部嵐雪

角力とり並ぶ
や秋のから錦
嵐雪

角力とり並ぶや秋のから錦

嵐雪筆蹟

黄菊白菊その外の名はなくもがな。

同 人

蒲團着て寝たる姿や東山。

同 人

時鳥鳴くや雲雀と十文字。

向井去來

應々といへど叩くや雪の門。

同 人

我が事と泥鰯の逃げし根芥かな。

内藤文草

大原や蝶の出で舞ふおぼろ月。

同 人

そこもとは涼しさうなり峯の松。

各務支考

うの花に笠着
て行む川むか
ひ 支考



支考筆蹟

郭公顔の出されぬ格子かな。

志太野坡

長々と川一筋や雪の原。

春華園凡兆

正岡子規
名は常規、
山市の人、
十五年、明治三十
十六、癸卯、年三十、
俳松

眞淵
賀茂氏、遠江
國の人、
時代後期、
學者、明和六
年(三三)歿、
年七十二、
貞享
靈元・東山兩
天皇の年號(三
三四―三三七)

卯の花に月毛の駒の夜明かな。
梅の花赤いはく赤いはな。
山寺に米搗くほどの月夜かな。
目には青葉山郭公初鱈。

森川許六
廣瀬惟然
越智越人
山口素堂

二一 芭蕉の俳句を評す

正岡子規

芭蕉以前の十七字詩は、陳套に屬し、卑俗に墮ち、諧謔に失して、文學と稱すべき價值なく、芭蕉以前の漢詩は文辭の間和臭の厭ふべきものあるのみならず、其の觀念も亦實に幼稚にして見るに堪へず、芭蕉以前の和歌は縁語を尊び譬喩を重んじて、陳腐と陋俗との極に達し、而して眞淵の古調は未だ其の萌芽をも現すに及ばざりしなり。されば、芭蕉の勃興して貞享・元祿の間に一旗幟を樹てたるは、獨り俳諧の面目を一新したるに止まらずして、實に万葉集以

元祿
東山天皇の年
號(三三三―三
三六)

高館
衣川館・判官
館ともいふ、
源義經の居住
した地

最上川
羽前國の中央
を流れて日本
海に入る川
兼好法師
吉田氏本姓
は卜部、鎌倉
時代、正平五
年(一一三三)歿、
六十八

後、日本韻文學の面目を一新したるなり。況や雄健放大的の所に至りては、芭蕉以前絶えてこれなきのみならず、芭蕉以後にも亦絶えてこれなきをや。



松尾芭蕉

夏草やつはものどもが夢の跡。

こは奥州高館にての懷古なり。無雜作に詠み出せる一句十七字の中に、千古の興亡を説き、人世の榮枯を示し、俯仰感慨に堪へざるものあり。世人或は此の句を以て平淡とせん。

其の平淡と見ゆるが即ち此の句の大なる所にして、人工を離れ自然に近きが爲のみ。

五月雨を集めて早し最上川。

古人此の句を解して、兼好法師の、最上川はやさぞまさる雨雲の昇

天門中斷

天門中斷楚江

開、碧水東流

至北廻、兩岸

青山相對出

孤帆一片日邊

來李白、望天

飛流直下

日照香爐

生紫煙、遙看

瀑布掛長川、

飛流直下三

千尺、疑是銀

河落九天、

(李白、望廬

山瀑布)

れば下る五月雨の頃。の意を取れりとす。此の歌より換骨奪胎して「集めて早し」と言ひなしたる、巧を弄して而も纖柔に落ちず只雨後の大河滔々として岩をも碎き山をも劈かんずる勢を成すを見るのみ。兼好の作亦此の一句に及ばず。况や凡俗の俳家者流豈に指を竝に染むるを容さんや。

荒海や佐渡に横たふ天の川。

こは越後の出雲崎より佐渡を見渡したる景色なり。此の句を取りて一誦すれば、波濤澎湃、天水際涯なく、只一孤島の其の間を點綴せる光景眼前に彷彿たるを見る。這般の大觀、銀河を以て之に配するに非ざるよりは、焉んぞ能く實際を寫し得べき。「天門中斷楚江開」の詩は此の句の經にして、「飛流直下三千尺」の詩は此の句の緯なり。思うて竝に到れば、誰か芭蕉の大手腕に驚かざる者ぞ。

五月雨の雲吹落せ大井川。

連日の雨に流石の大井川も水嵩増して兩岸を浸したる様、滔々と物凄き瀬の音、耳に響くやうなり。

郭公大竹原を漏る月夜。

千竿の修竹微風遠く度りて、一痕の新月靜に青光を碎く。獨り滿地の涼影を踏んで吟歩する時、杜鵑一聲二聲、何處の山上よりか啼き過ぎて、雲外蹤を留めず。初夏清涼の意肌を襲ひ骨に徹するを覺ゆ。山を着けず、水を着けず、一個の竹篁を假り來つて、却つて天地の寥廓なるを見る。妙手、妙手。

棧橋や命をからむ蔦かづら。

木曾山中の棧橋、絶壁に沿ひ深谿に臨んで委蛇屈曲す。足を歇てて幾橋を渡り、立つて後を顧みれば、危巖突兀として、橋柱落ちんと欲す。只見る、幾條の薜蘿彼と此とを彌縫して、紅葉血を灌ぐが如し。此の句、雄壯の裏に悽楚を含み、悽楚の裏に幽婉を含む。亦是

木曾
信濃國

一種の靈筆。俗人時に中七字の句法を稱して全體の姿致を見ず、即ち金箔を拜して佛體を見ざる類なり。而して其の實中七字の巧を弄したるは此の句の缺點なり。

塚も動け我が泣く聲は秋の風。(一笑を弔ふ)

「如動古人墓」といふ古句より奪胎したるにや、我が泣く聲は秋の風」と一氣呵成に言ひ下したる所、常人の企及する所に非ず。人丸の歌に、妹が門見ん、靡け此の山」と詠みたと同一の筆法なり。

秋風や藪も畠も不破の關。

新古今集攝政太政大臣の歌に、人すまぬ不破の關屋の板庇荒れにし後はたゞ秋の風」とあるより思ひ寄りたりとは見ゆるものから、「藪も畠も不破の關」と名所の古を偲び今を敘でたる筆力、十七字の小天地綽々として餘裕あるを見る。高館の句は豪壯を以て勝り、此の句は悲慘を以て勝る。好一對。

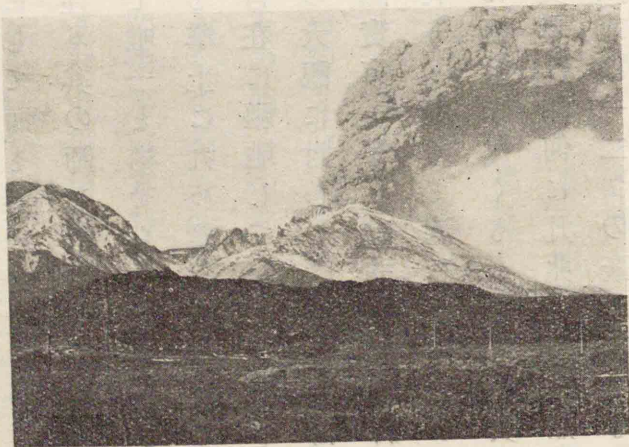
一笑
小杉氏、金澤
の門人、芭蕉の
人丸
人麿とも書
く、柿本氏、
持統・文武二
朝に事へた
妹が門見ん
人丸が石見國
から妻に別れ
て上つた時の
長歌

淺間
信濃國

猪も共に吹かるゝ野分かな。
暴風山を搖かして野猪吹きまくら
るゝ様、悲壯荒寒、筆紙に絶えたり。
吹きとばす石は淺間の野分
かな。

淺間山の野分吹荒れて、燒石空に翻
る凄じさ、意匠最妙なりと雖も、石は
淺間の」と續く所、多少の窮策を取る、
白壁の微疵なり。

滑稽諧謔を以て生命としたる俳
諧の世界に生れて、周圍の群動に制
御瞞着せられず、能く文學上の活眼を開き、一家の新機軸を出し、此
等老健雄大なる俳句をものして、嶄然頭角を露はせるは、實に文學



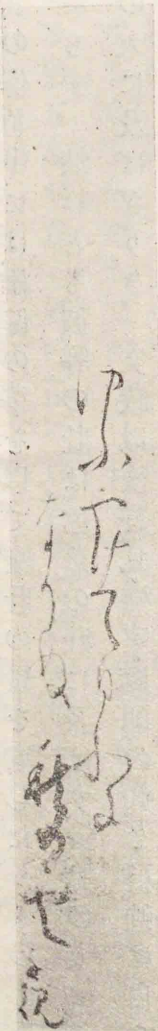
淺 間 山

上の破天荒と謂ひつべし。而して後世之を模倣する者出でざるは、實に不思議なる事實にして、芭蕉をして二百年間只一人の名を負はしむる所以なり。蕉門の弟子にして、而も其の力量に於ては決して芭蕉に劣らざるのみならず、往々其の師を壓倒する者多し。幾百の人材中、學識に於て才藝に於て唯一と稱せられたる晋子其角は如何に。故事古語を取つて之を掌上に丸め、難題を難とせず、俗境を俗ならしめず、縦横に奔放し、自在に驅馳して、傍に人なきが如き其の人も、造化の祕藏せる此等の大觀に對しては、終に片言隻語の玆に及ぶ所なし。十六弟子中、誠實第一なる向井去來は、神韻に於て聲調に於て、復に芭蕉に勝りたり。斯くて流石に一二の豪壯なる句なきに非ざるも、遂に芭蕉に匹敵すべくもあらず。其の他嵐雪は如何に、丈草は如何に、許六支考は如何に、凡兆尙白は如何に、正秀乙州李由は如何に。此等の人、或は一二句の豪壯なるもの

明和
後櫻町天皇の
年號(四三—四三
四三)
天明
光格天皇の年
號(四三—四三
四三)

ゆふやけて日
和になりぬ秋
の雲
子規

あらん、終に數句を有せざるべきなり。況や其の他の小弟子をや。元祿以來俳家の輩出して、俳運の隆盛を極めたるは、明和・天明の間なりとす。白雄は「寂の葉」を著して盛に蕉風を唱道せりと雖も、其の神髓を以て幽玄の二字に歸し、終に豪壯雄健を説かず。其の作る所を見るも、句々纖巧を弄し、婉曲を主とするのみにして、芭蕉の堂に上ることを得ず。蓼太は敏才と猾智とを以て一時天下の耳目を聳動せしも、固より其の眼光は針尖の如く小なりき。蕪村、曉臺、蘭更の三豪傑は、古來の蕉風外に出入して各、一派を成せり。此の三人の獨得なる所は、芭蕉及び其の門弟等が當時夢想にも知り得ざりし所にして、俳諧史上特筆大書すべき價值を有す。されば、



子規筆蹟

文政
仁孝天皇の年
號の四百六十一號
也

其の俳句中には、雄健の筆を以て豪壯の景を寫したるものに乏し
からず。然れども、彼等の壯は芭蕉の壯に及ばず、彼等の大は芭蕉
の大に及ばざりき。文政以後、蒼虬、梅室、鳳朗の如き群蛙は自ら好
んで三尺の井戸に棲息したる者、固より與に大海を談ずべからず。
是に於てか芭蕉は揚々として俳諧壇上を濶歩せり。嗚呼、芭蕉以
前已に芭蕉なく、芭蕉以後復芭蕉なきなり。(懶祭書屋俳話)

自修文

二二 越路の芭蕉

吉田絃二郎

吉田絃二郎
名は源次郎、
佐賀縣の人、
明治十九年
生、文學者、早
稲田大學講師
北日本海
越後國柏崎附
近

或秋の日の午後であつた。

ひどく旅簍りょうれした芭蕉は、北日本海に沿うて歩いてゐた。まだ
五十には三四年の間があるのであつたが、芭蕉の髪は可なり白く
なつて、誰が見ても、彼は實際の年よりは七八年も老よけてゐた。彼

曾良
河合氏、芭蕉
と奥の細道の
旅をした俳人

梟首
さらす

の額には暗い憂鬱さが刻みつけられてゐた。彼のすぐ後からは、
曾良が疲れた足を引摺つて歩いてゐた。曾良は二三日腸を悪く
してゐるのであつた。

二人とも大抵黙りがちで歩いてゐた。まだ夜が明けて間もな
くであつた。霧に包まれた村では、雞の朝鳴きが聞えてゐた。

彼等は、或村の出外れの畑の中に、黨を組んで代官を殺さうとし
た七人の男の首が梟うされてゐるのを見た。首は露に濡れて鉛色
になつてゐた。

不幸な遺族たちであらう、露に濡れて土色をした十二三人の男
女がひそ／＼と首の下で語りあつてゐた。手拭で顔を掩うてゐ
る女もあり、失神したやうに口を明けたまゝ、夜明の空を見詰めて
ゐる男もあつた。首の下には焚火の煙が低く漂うてゐた。梟首
臺の後の柿の木には、鳥が二羽きよとんと止まつてゐた。右の端

にある男の首が不思議に芭蕉の心を惹きつけた。その男の顔は他のどれよりも色が白かった。また年が若かった。そして、左の眼が半ば明いてゐて、特にいたゞしく見えた。

芭蕉はその若者の首を思ひ出す毎に、自分自身の心の底に、或者の嚴かな聲を聞くのであつた。

彼は、渡鳥のやうに旅から旅へとさまよひ歩いてゐる自分の生活と、撻たたれたながらなほ黙々として耕し、苦しみ喘あへいでゐる人達の生活とを比べて考へないではゐられなかつた。右の端にある若者の眼が、じいつと彼の心を見詰めてゐた。それはこの上もなく嚴肅な人間生活の事實であつた、痛ましい現實であつた。

彼は人生を幻影げんえいであると思ふこともあつた。しかし、今彼の眼前に梟うされてゐる七人の男の首！ それをしも彼は幻影である
と斷言することが出来るか。それはあまりに悲慘な殘酷な人間

峽
山と山の間

生活の現實ではないか。彼は果してこの傷ましい現實を見遁すことが出来るであらうか。——藝術といふ美しい名に隠れて。

「どうすればいゝのだ。」彼はどうしても、その若い男の首や、その首が彼に語つてゐる言葉を忘れることが出来なかつた。

彼は或者の嚴かな叱責しつせきを感じながら道を歩いてゐた。彼が不圖氣づいた時、曾良が坂を上つて來てゐた。芒すすきが曾良の姿をすつかり隠してしまふことも幾度かあつた。白膠木はくがうもくや柿の葉が赤く紅葉した秋の山を背にして、曾良は峽がの道を上つて來てゐた。

北日本の海が芭蕉の眼前に擴がつてゐた。暗綠色の海の面を罩おほめて、一つ／＼の波頭が實在そのものの悠久から悠久への悲みを訴へるかのやうに、暗い空に對していきり立つては、やがて消えて行つた。名も知らぬ小鳥が波の上を低く掠かめては、懶おろい雲の中に消えて行くこともあつた。

みじろき
身動き

煙のやうな波の間に、佐渡の島を見出した時、彼はそこに突立つたまゝ、一時はみじろきもしなかつた。
もう彼の頭の中では、烟の中に梟されてゐた七つの首も、半ば開いてゐた若い男の眼も幽になつてゐた。彼の心は今現在に生きて佐渡を見つゝ、あるといふ意識に躍り上つてゐた。
同時に、彼の心は、凡べての現在はやがて滅んで行かなければならぬといふ感じに打たれて、悲みに包まれてしまつてゐた。
一つの波が白く立上つた。次の刹那に波は暗の中に消えて行つた。

「凡べてのものは音もなく滅んで行く。それでいゝのだ。滅んで行く静かな姿！ 嚴かな死！ 尊い死の姿！ それを靜かな心で見詰めてゐる。それが人生の凡べてだ！」
彼は、何處から來て何處へ行くとも知れぬ渡鳥の一生を、自分自

身の運命になぞらへても見た。

風が靜に芒の穂を撫でながら、海の面から山の面へと吹いて行つた。その戦ぐ聲が幽に夕空の中に響いて消えて行つた。そこにも永劫の現實の聲があり、永劫の死滅の聲があつた。

「先生、御覽なさい。」

曾良は疲れた顔に幾分の微笑を含ませながら、一段低い石の傍を指さした。

芭蕉は何氣なしに曾良の指さした方を見た。一人の年老いた乞丐が道端の枯葉の上に眠りこけてゐた。

彼は、その刹那に、二十幾年前の或秋の夜、木曾川の土手で、始めて路通と知つた折のことを思ひ出した。

二十幾年前と同じやうな秋の夕暮であつた。同じやうに霧が罩めてゐた。乞丐の枕元には、木曾川の堤で見たと同じやうに、焚

路通
芭蕉の門人、
木曾川のほと
りて乞丐して
ゐたのを拾ひ
上げて、それ
が、後事によ
つて出奔した

火した跡さへ残つてゐた。

曾良は近寄つて乞丐を起さうとした。芭蕉は微笑みながら、曾良のすることを眺めてゐた。しかし、曾良が乞丐の前に立止まつた一刹那であつた。芭蕉は二三步乞丐の方へ近づきながら、曾良の手を引いた。

「起さない方がいゝ。」

「このまゝにしとくんですか。」

芭蕉は頷いて見せた。

「でも夜露に打たれて風でも引いたらいけませんまい。」

「それもさうだが。」

芭蕉はじいつと乞丐の顔を眺めた。何といふ静かな眠であらう、何といふ自然の眠であらう、何といふ平靜な呼吸であらう。秋

そのものの寂寞と孤獨と沈靜とが乞丐を包んでゐた。秋の海、秋の山、秋の空、凡べての悠久そのものの中に、乞丐は柔に抱擁されてゐた。

「起してはいけない。」

曾良は躊躇した。芭蕉の顔をじつと見た。

「そうつと寝かしておいた方がいゝ。寝てゐる間だけが幸福なのだ。」

芭蕉は足音を盗むやうにして峠を越えた。

乞丐の姿が見えなくなつた時、そして、乞丐が眼を覺まसानかつたことを確めた時、彼は軽い安心を覺えた。秋の夕暮を靜に眠つて過す乞丐の幸福を祈りながら、彼は峠を下りて行つた。

「若しあの時、路通を起しさへしなかつたなら、路通は今日もあ

の乞丐のやうに、自然の懷に抱かれて、秋の夜を靜に眠つて過してゐるであらうに。」

芭蕉は、人から卑しめられると僻ひがんだ路通が、彼の許ゆるから罪の子としてさまよひ出したことを胸に描いたのであつた。

芭蕉は俯向きがちに山の背を歩いてゐた。

「先生、海の火が見えます。」

曾良が後から高い聲で叫んだ。

暗い山の根を洗ふ白い波頭はつが仄見えてゐた。漁火が散つてゐるのであつた。

「天の川です、あんなに……」

曾良は天を指さした。

一脈の銀河が佐渡の島へかけて瞬またき初めてゐた。芭蕉は曾良が後から跟ついていて來るのも忘れ、また路通や老乞丐のことさへも忘

れて、その魂を銀河の中に投げてゐた。

峠を下りきつた頃から、空が曇つて來た。山の麓の小さな村里の燈火が見えるやうになつた頃は、時雨しぐれが草の上に幽かな音を立てて過ぎて行つた。

芭蕉も曾良も笠を前被りにして雨を避けた。

「あの乞丐はどうしたらう。雨に濡れはしなかつたらうか。」
村の入口であつた。

「この雨に濡れて眼を覺ましたでございませうよ。」

「濡れたらうかなあ。」

芭蕉は峠の方を振返つて見た。黒い雲が巨人のやうに暗い山を掩おほうてゐた。彼は暫くそこに立止まつて、暗い峠の方をじつと眺めてゐた。(芭蕉)

二三 奥の細道

松尾芭蕉

一首 途

月日は云々
天地者万物之
 逆旅、光陰者
 百代之過客、
 李白、春夜
 宴三桃李園
 序

去年
元祿元年

白河の關
磐城國白河郡
 古關村大字
 宿にある、
 奥の關門

杉風
鯉屋市兵衛と
 いふ、芭蕉の
 門人

別墅
深川六間堀に
 あつた

月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。船の上
 に生涯を泛べ、馬の口捉へて老を迎ふるものは、日々旅にして、旅を
 棲處とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか
 片雲の風に誘はれて、漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年の秋江
 上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白
 河の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招
 きにあひて、取るもの手につかず。股引の破れを綴り、笠の緒つけ
 かへて、三里に灸するより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方
 は人に譲り、杉風が別墅に移る。
 草の戸も住みかはる世ぞ雛の家。
 彌生も末の七日、曙の空おぼろ／＼として、月は有明にて光をさ

上野・谷中
ともに今の東
 京市下谷區に
 屬する

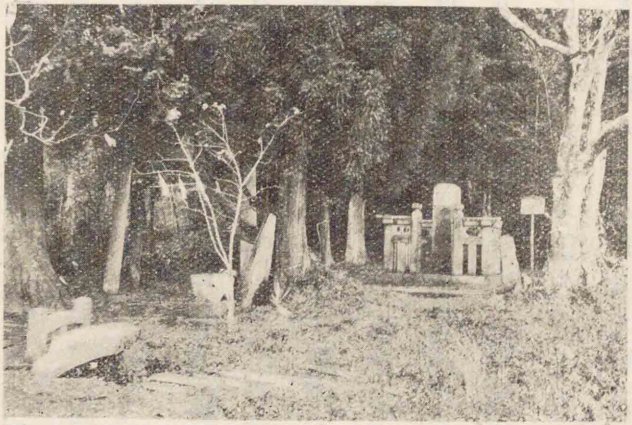
千住
武藏國、今の
 東京市の東北
 口

草加
武藏國、奥州
 街道に當る

まれるものから、富士の峯かすかに見えて、上野・谷中の花の梢、また
 いつかはと心細し。睦じき限りは宵より集ひて、船に乗りて送る。
 千住といふ處にて船をあがれば、前途三千里の思、胸に塞がりて、幻
 の巷に離別の泪を注ぐ。
 行く春や鳥啼き魚の眼は涙。
 これを矢立の始として、行く道なほ進まず。人々は途中に立並び
 て、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。
 今年元祿二年、奥羽長途の行脚たゞ假初に思ひ立ち、耳に觸れて
 未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと定めなきたのみの末をかけ、
 其の日漸く草加といふ宿に辿り着きにけり。瘦骨の肩にかゝれ
 るもの先づ苦しむ。たゞ身すがらにと出立ち侍るを、紙衣一衣は
 夜の防ぎ、浴衣、雨具、墨筆のたぐひ、あるはさがりがたき、臙などしたる
 は、さすがに打捨てがたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

しかで都へ
 いたよりあらば
 いかに都へつ
 げやらん今日
 白河の關はこ
 えぬと(平兼
 盛、拾遺集)
 秋風を
 都をば霞と共
 に立ちしかど
 秋風ぞ吹く白
 河の關へ能く因
 法師、後拾遺
 集)
 紅葉を
 都にはまだ青
 葉にて見しか
 ども紅葉ちり
 しく白河の關
 (源頼政、千
 載集)
 卯の花の
 見て過ぐる人
 の花の咲ければ
 垣根や白河の
 關(藤原季通、
 千載集)
 清輔
 藤原氏、二條
 天皇の頃の人
 壺のいしぶ
 み

二 白河の關
 心もとなき日數重なるまゝに、白河
 の關にかゝりて旅心定まりぬ。いか
 で都へと便り求めしものことわりなり。
 中にも、此の關は風騒の人こゝろを留
 む。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、
 青葉の梢なほ哀れなり。卯の花の白
 妙に茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆ
 る心地ぞする。古人冠を正し衣裳を
 改めしことなど、清輔の筆にも留めお
 かれしとぞ。



白河の關の趾

壺のいしぶみは市川村多賀城にあり。高さ六尺餘、横三尺ばかり。

三 壺碑

一名多賀城
 碑、陸前國宮
 城郡多賀城村
 にある

多賀城
 去京一千五
 百里、去蝦夷
 國界一百廿
 里、去常陸國
 界二百四十
 里、去下野國
 界二百七十里、
 去三野國界
 四里、去三野
 國界三千里
 (以下は本文
 にある)

神龜
 聖武天皇の年
 號(三十四一三
 五)
 大野東人
 元明天皇に仕
 へた
 天平寶字
 孝謙、淳仁兩
 天皇の年號(二
 四一、二四二、
 二四三、二四四)
 藤原朝徳
 仲鷹の子

りか。苔を穿ちて文
 字かすかなり。四維
 國界の里數をしるす。
 「此城、神龜元年歲次甲
 子、按察使兼鎮守將軍
 從四位上勳四等大野
 朝臣東人之所置也。天
 平寶字六年歲次壬寅、參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按
 察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝徳修造也。天平寶字六年十二月一日」
 とあり。昔より詠みおきける歌枕多く語り傳ふといへども、山崩
 れ、川流れて、道改まり、石は埋れて土に隠れ、木は老いて若木に代れ
 ば、時移り代變じて、其の址たしかならぬことのみなるを、疑もなき
 千歳の記念、今眼前に古人の心を閱す。行脚の一徳、存命の悦、羈旅

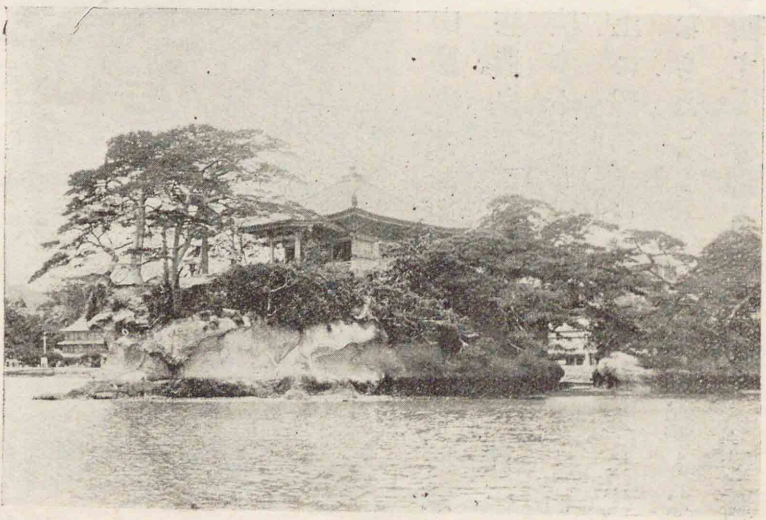


多賀城の碑

の勞を忘れて泪落つるばかりなり。

四 松島

そも、事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭、西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡して、欵つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ひ、あるは二重に重なり三重に疊みて、左に別れ右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するがごとし。



松島五堂

洞庭 支那湖南省にある大湖
西湖 支那浙江省にある湖
浙江 支那省東北部の海

平泉 陸中國

石卷 陸前國

黄金花咲く すめろぎの御代榮えんとおづまなるみちのくやまにこがね花咲く (大伴家持、万葉集)

袖の渡 陸前國桃生郡橋浦村にあるといふ

尾駮の牧 詳かでない

眞野の萱原 陸前國牡鹿郡眞野の地であるといふ

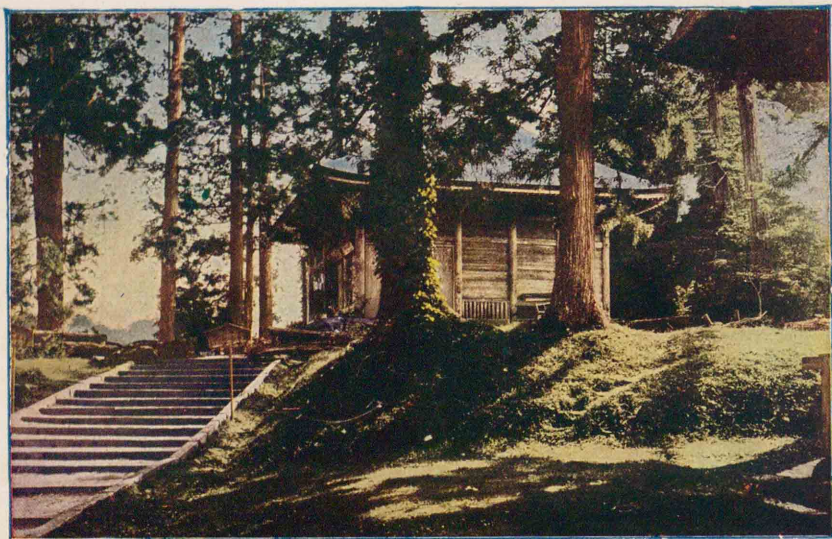
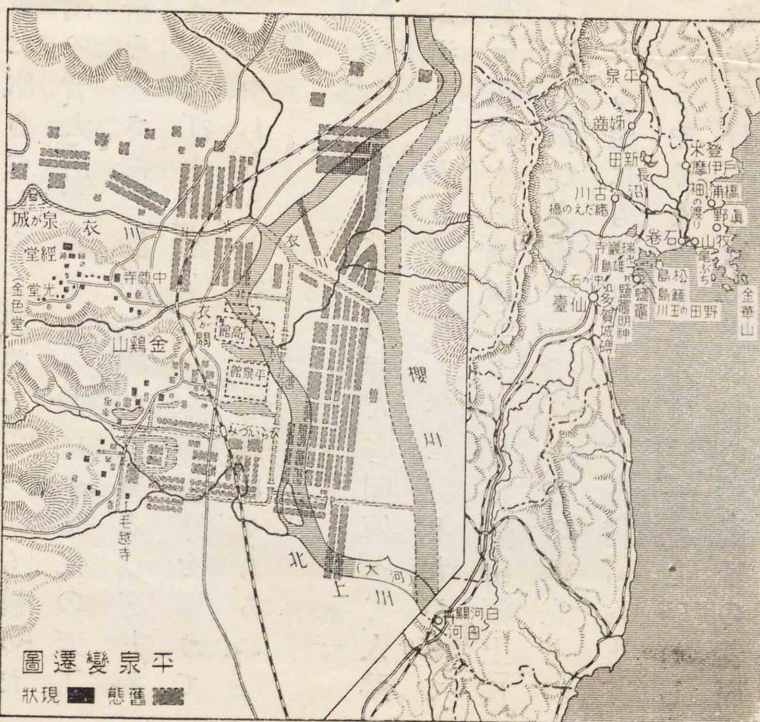
松の緑濃やかに、枝葉汐風に吹きたわみて、屈曲おのづから撓めたるが如し。千早ぶる神代の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ辭を盡さん。雄島が磯に立寄るほど、月海に映りて、晝の眺また改まる。江上に歸りて宿を求め、窓を開きて風雲の中に旅寝するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

五 平泉

十二日、平泉へと志し、あねはの松緒だえの橋など聞傳へて、人跡稀に、雉兔芻蕘の往きかふ道することも分かず。終に踏みたがへて石巻といふ湊に出づ。黄金花咲くと詠みて奉りし金華山海上に見わたされ、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、竈の煙立ちつづきたり。想ひかけずかゝる處にも來れるかなと、宿借らんとすれど、更に宿かす人なし。やうやくまどしき小家に一夜を明かして、明くればまた知らぬ道迷ひ行く。袖の渡、尾駮の牧、眞野の萱原

長沼 陸前國登米郡新田村の東南にある、一名新田沼
 戸伊摩 同郡登米町のことであらう
 三代 藤原清衡・基衡・秀衡
 秀衡が跡 即ち平泉館址、奥御館と稱する
 金雞山 秀衡が富士山に擬して造り、黄金製雄雞を山上に埋めて平泉の鎮護としたもの

などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に到る。其の間二十餘里ほどとおぼゆ。三代の榮耀一炊の中にして、大門の跡は一里此方にある。秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を残す。まづ高館に登れば、北上川、南部より流る、大河なり。衣川は



堂色金寺尊中



面正部内上同

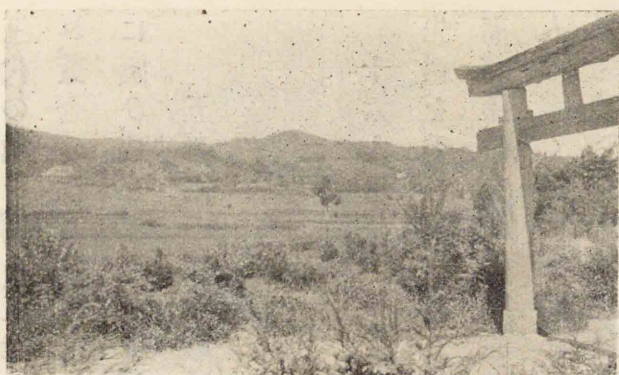
中尊寺は巖手縣西磐井郡平泉村大字衣關にある天台宗の寺で、關山臺壽院といふ。長治二年藤原清衡の本願によつて建立され、次いで基衡秀衡がこれを擴張したので、當時奥羽第一の大伽藍として大に隆盛を極めた。

金色堂は光堂とも稱し、清衡・基衡・秀衡の墓廟である。堂は方三間で、中央方一間が内陣、その他が外陣である。内陣に佛壇があり、その上に阿彌陀三尊・二天六地藏などの像を安置し、内に棺を入れ、清衡の遺骸を藏してある。その後方左右隅の間にもまた各々佛壇があつて、左に基衡、右に秀衡の遺骸を藏してある。正應元年、鎌倉將軍惟康親王は堂宇の廢壞を憂へて、平貞時同宣時に命じて、方五間の套堂を造らせられた。

金色堂の價値は實にその内外の裝飾にある。その裝飾は當時の工藝の精を極め華を集めたもので、その纖巧精美なことは鳳凰堂と伯仲の間にある。その外部は、柱・扉・壁・軒・屋蓋など、悉く漆を塗り金箔を押し、内部は一層華麗を極めてゐたから、當時の美觀は今日の人の想像以上であつたらう。

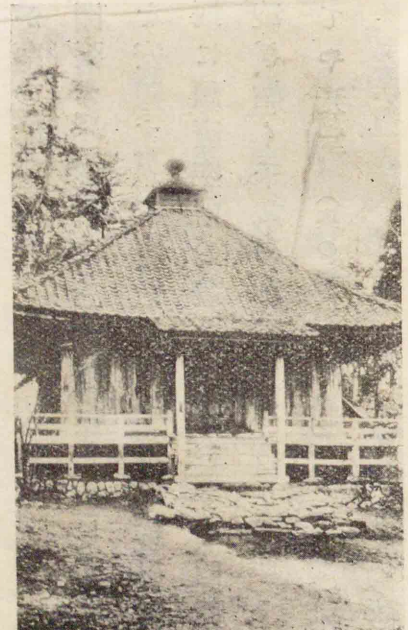
泉が城
(秀衡の子の居城であつたからこの名がある)
 泰衡
 秀衡の子

國破れて
 國破山河在、
 城春草木深、
 感時花濺淚、
 恨別鳥驚心、
 烽火連三月、
 家書抵萬金、
 白頭搔更短、
 渾欲不勝簪、
(杜甫、春望)



金 雞 山 遠 景

て時の移るまで涙を落し
 侍りぬ。



經 堂

泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ちいる。泰衡等が舊跡は衣が關をへだてて南部口を差固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷き

經堂
清衡建立、建
武四年修理し
たもの
光堂
金色堂ともい
ふ

夏草やつはものどもが夢の跡。
かねて耳驚かしたる二堂開張す。經堂は三將の像を遺し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて、珠の屏風に破れ、黄金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新に圍ひ、藁を覆うて風雨を凌ぎ、姑く千歳の記念となれり。

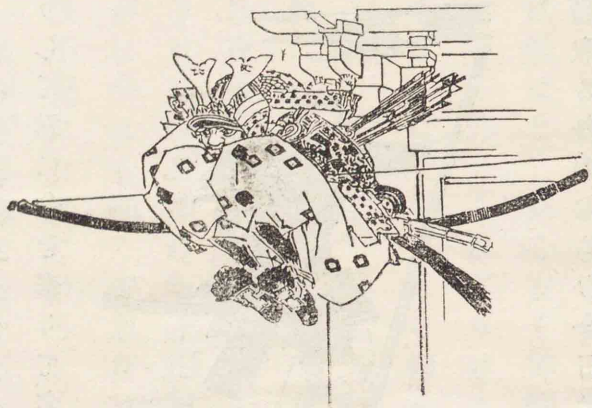
五月雨の降りのこしてや光堂。(奥の細道)

二四 佐藤忠信

淡海公
藤原不比等
佐藤莊司
名は元治

十六人思ひくゝに落ちかゝる所に、音に聞えたる剛のものあり。先祖を委しくたづぬるに、鎌足の大臣の御裔淡海公の後胤佐藤範高が孫、信夫の佐藤莊司が二男、四郎兵衛藤原の忠信といふ侍なり。人も多く候に、御前に進み出で、雪の上に跪きて申しけるは、君の御有様と我等が身とを物によくく、譬ふれば、屠所に赴く羊、夫妻の

情もいかでか是には勝るべき。君は御心安く落ちさせ給へ。忠



能登殿
平教經

佐藤忠信 (菊池容齋筆)

信は是に留り候うて、麓の大衆を待ち得て、一方の防矢仕り、一先づ落ち参らせ候はばや」と申しければ、尤も志は嬉しけれども、御邊の兄嗣信が、屋島の軍の時、義經が爲に命を捨て、能登殿の矢先に當りて失せしかども、是まで御邊の附き給ひたれば、嗣信も兄弟ながら未だある心地してこそ思ひつれ。年の内は思へば幾程もなし。人も命あり、我もながらへたらば、明年の正月末、二月初には陸奥へ下らんずれば、御邊も下りて秀衡をも見よかし。また、信夫

治承
高倉天皇の年
號(公曆一〇八〇)

の里に留め置きし妻子をも、今一度見給へかし。」と仰せられければ、「さ承り候ひぬ。治承二年の秋の頃、陸奥を出で候ひし時も、今日よりして君に命を奉りて、名を後代に揚げよ。矢にも當り死しけりと聞かば、供養は秀衡が忠を致すべし。高名度々に及ばば、勳功は君の御計らひ。」とこそ申し含められしか。「命を生きて故郷へ歸れ。」と申したることも候はず。信夫に留め候ひし母一人候も、其の時を最期とばかりこそ申し切りて候ひしか。弓



(筆齋容池菊) 慶辨坊藏武

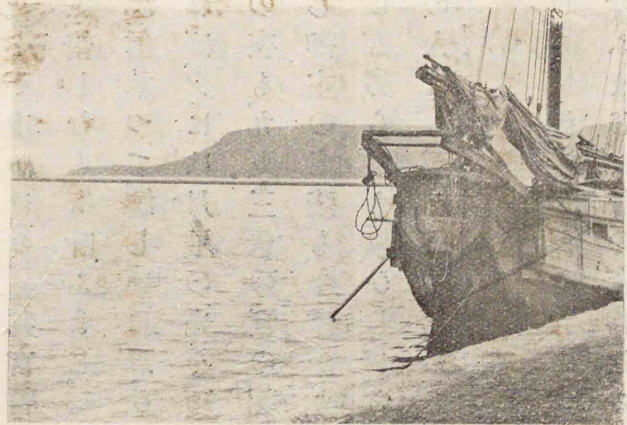
箭取る身のならひ、今日は人の上、明日は我が身の上、皆斯くこそ候はめ。君こそ御心弱く渡らせ給ひ候とも、人々それよきやうに申

坂上田村丸
桓武天皇の時
の征夷大將軍
藤原利仁
醍醐天皇の時
の鎮守府將軍

させ給ひ候へや。」とぞ申しける。武藏坊之を聞きて申しけるは、「弓箭取る者の言葉は綸言に同じ。言葉に出しつることを翻すことは候はじ。只心安く御暇を賜はりたし。」とぞ申しける。判官暫く物をも仰せられざりけるが、やゝありて、惜しむとも叶ふまじ。さらば心に任せよ。」とぞ仰せられける。忠信承つて、嬉しげに思ひて、たゞ一人吉野の奥にぞ留りける。されば夕には月、星の光を頂き、晨には教訓の霧を拂ひ、玄冬、素雪の冬の夜も、九夏、三伏の夏の朝も、日夜朝暮、片時も離れ奉らず仕へ奉りし御主の名残も、今ばかりなりければ、日頃は坂上田村丸、藤原利仁にも劣らじと思ひしが、さすがに今は心細くぞ思ひける。十六人の人々も、面々に暇乞して、前後不覺になりにけり。

又判官、忠信を近く召して仰せられけるは、「御邊が佩きたる太刀は、寸の長さ太刀なれば、流に臨んでは叶ふまじ。身の疲れたる時、

太刀の伸びたるは悪しかりなん。之
を持つて最期の軍せよ。」とて、黄金作り
の太刀の二尺七寸ありけるに、劍の樋
かきて、地肌心も及ばざるを取出して
賜はりけり。「此の太刀寸こそ短けれ
ど、身に於ては逸物にてあるぞ。義經
も身に代へて思ふ太刀なり。それを
如何にといふに、平家の兵ども兵船を
揃へし時に、熊野の別當の権現の御劍
を申しおろして賜ひしを、信心を致し
たりしに由りてや、三年に朝敵を平げ
て義朝の會稽の恥を雪ぎたりき。命に代へて思へども、御邊も身
に代ふれば取らするぞ。義經に添うたりと思へ。」とぞ仰せられけ



望遠の島屋

る。四郎兵衛之を賜はりて戴き、あはれ御佩刀や。これ御覽候へ、
兄にて候ひし嗣信は、屋島の合戦に君の御命に代り参らせて候ひ
しかば、奥州の秀衡が参らせ候ひし大夫黒といふ馬を賜はりて、冥
途までも乗り候ひぬ。忠信
忠を致し候へば、御祕藏の御
佩刀賜はりて候ひぬ。これ
を人の上と思召すべからず。
誰もく皆斯くこそ候はん
ずれ。」と申しければ、各、涙をぞ
流しける。
判官仰せられけるは、「何事か思ひ置くことのある。」御暇賜はり
候ひぬ。何事を思ひ置くべしとも覚え候はず。但し末代までも
弓箭の瑕瑾なるべし。少し申上げたきことの候へども、畏れをな



源義經 (菊池容齋筆)

して申さず候。」と申しければ、「最期にてあるに、何事にて申せ。」と仰を蒙り、跪きて申しけるは、「君は大勢にて落ちさせ給はば、某はこれに一人留り候べし。」吉野の修行押寄せ候うて、是に九郎判官殿の渡らせ給ひ候か。」と申し候はんに、「忠信と名のり候はば、大衆は極めたる貨殖の者にて候へば、大將軍もおはしまさざらん所にて、私軍益なしとて歸り候はんことこそ、末代まで恥辱になりぬべく候へ。今日ばかり清和天皇の御號を預るべく候はん。」とぞ申しける。「尤もさるべきことなれども、純友將門も、天命を背き参らせしかば終に亡びぬ。ましていはんや義經は院宣にも叶はず、日頃よしみありつる者ども心變じつる上は、力及ばず、今日を暮らし夕を明かすべき身にてもなければ、竟に逃れなからんものゆるに、清和の名を許しけりといはれんことは、他の譏をばいかゞすべき。」と仰せられければ、忠信申しけるは、「やうにこそより候はんずれ。」大衆押寄せ

清和天皇
第五十六代
純友
將門
藤原氏
平氏

て候はば、箆の矢をさんぐに射盡し、矢種盡きば、太刀を抜き、大勢の中へ亂れ入り、切廻りて後、刀を抜き、腹を切り候はん時、誠にこれは九郎判官と思ひ参らせ候はんずれ。げには御内に佐藤四郎兵衛といふ者なり。君の御號を借り参らせて、合戦に忠を致しつるなり。首を取つて鎌倉殿の見参に入れよ。」とて、腹搔切り死なん後は、君の御號も何か苦しく候はん。」とぞ申しける。「尤も最期の時斯様にだに申し分けて死に候ひなば、何か苦しかるべき殿原。」と仰せられて、清和天皇の御號を預けらる。之を現世の名聞、後の世のうつたへとぞ思ひける。「御邊が着たる鎧は如何なる鎧ぞ。」と仰ありければ、「是は嗣信が最期の時着て候ひし。」と申せば、「それは能登守の矢にたまらず通りたりし鎧ぞ。頼む所なし。衆徒の中には聞ゆる精兵のありけるぞ。之を着よ。」とて、緋緘の鎧に白星の冑を添へて賜はりけり。着たりける鎧を脱ぎて、雪の上に差置き、雑色ども

にたび候へ。と申しければ、義經も着代ふべき鎧もなし。とて、召しぞ代へられける。まことに例なき御事にぞありける。

「さて、故郷に思ひ置くことはなきか。」と仰せられければ、我も人も衆生界の習にて、なかは故郷のことを思はざらん。國を出でし時、三歳になり候子を一人留め置きて候ひしぞ。かの者に心付きて、父は何處にやらん。と尋ね候べきなれば、聞かせまほしくこそ候へ。又平泉出でし時、君ははや御立ち候ひしかば、鳥の啼きて通るやうに、信夫を打通り候ひしに、母の所に立寄り、暇乞ひ候ひしかば、齡衰へて、二人の子どもの袖に縋りて悲しみ候ひしこと、今のやうに覚え候。『老の末になりて、我ばかり物を思ふ者はあらじ。子どもに縁のなき身なりけり。信夫の莊司に過別れ、偶、近付きて不便に當られし伊達の女にも過別れ、一方ならぬ歎なれども、和殿原を成人せさせて、一所にこそなけれども、國の内にとありと思へば、頼も

しくこそ思ひつるに、秀衡何と思召し候やらん、二人の子どもを皆御供せさせ給へば、一旦の恨はさることなれども、子どもを成人せさせて、人數に思はれ奉るこそ嬉しけれ。間なく合戦に逢ふとも、臆病の振舞して父の屍に血をあやし給ふなよ。高名して四國、西國の果におはすとも、一年二年に一度も命あらん程は、下りて見もし見えられよ。一人留りて一人絶えたるだに悲しきに、二人ながら遙々と別れては如何せん。とて、聲も惜しまず泣き候ひしを振捨てて、『さ承り候。』とばかり申して打出で候より以來、三四年終に音信も仕らず。去年の春の頃、わざと人を下して、『嗣信討たれ候ひぬ。』と告げて候ひしかば、身も絶えなんと悲しみ候ひけるが、『嗣信がことはさて力及ばず。明年の春の頃にもなりなば、忠信が下らんといふ嬉しさよ。はや今年の日日も過ぎよかし。』などと待ち候なるに、君の御下り候はば、母にて候もの、急ぎ平泉へ参り、『忠信は何處に候

ぞ。』と申さば、『嗣信は屋島忠信は吉野にて討たれけり。』と承りて、いかにばかり歎き候はんずらん。それこそ罪深く覚え候へ。君の御下り候うて、御心安く渡らせおはしまし候はば、嗣信忠信が供養は候はずとも、母一人不便のおほせにこそあづかりたく候へ。』と、申しも果てず、袖を顔に押當てて泣きければ、判官も涙を流し給ふ。十六人の人々も皆鎧の袖をぞ濡しける。(義經記)

二五 攝待

ワキシテツレ次第旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしをらん。歌子に臥し寅に起馴れて、子に臥し寅に起馴れて、雲井の月を峯の雪、其の松島に參らんと、東路さして急ぎけり、東路さして急ぎけり。

ワキ詞、如何に申し候。先づ此の處に御休みあらうずるにて候。

シテ 佐藤嗣信母
子方 嗣信子
シテツレ 鶴若山
ツレ (判官) 源義經
ワキ 武藏坊 辨慶
處は陸奥

ツレ兼房承り候。や、是に高札の立ちて候。御覽候へ。ワキ、なに、な

に、佐藤の館に於て山伏攝待と候。やがて御着き候へ。兼房、佐藤

の館に於て山伏攝待のことは、我等が望む所なれども、佐藤の館が

憚りにて候ほどに、御通りあれかしと存じ候。ワキ、是は仰にて候

へども、唯知らぬやうにて御着きあらうずるにて候。

子方鶴若、如何に誰かある。狂言、御前に候。子方、山伏達は幾人御

着きあるぞ。狂言、十二人御着きにて候。子方、先づ出でて對

面申し候べし。

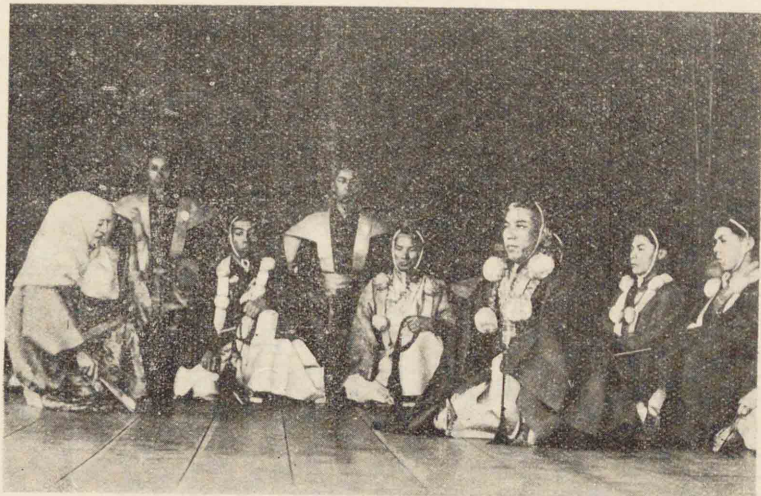
ワキ、是なる幼き人は誰が御子息にて渡り候ぞ。子方、是は佐藤

嗣信が子にて候。ワキ、扱嗣信殿は御内に御座候か。子方、判官殿

の御供申し、屋島の合戦に討たれて候。ワキ、扱此の攝待は如何な

る人の御企にて候ぞ。子方、判官殿十二人の山伏となり、奥へ御下

りのよし承り候ほどに、祖母にて候者、此の攝待を始めて候。見申



能の攝待

ども、十二人は是が始にて候。何れか我が君ぞ、何れがそにてましますぞ。夜も更けたり、人の知るべきことにもあらず、此の姥が耳にそと御教へ候はば、此の攝待の利生にて。地空しくなりし兄弟を、再び見ると思ふべし、再び見ると思ふべし。親子よりも主従は、親子よりも主従は、深き契の中なれば、さこそ我が君もあはれと思召すらめ。殊更御爲に命を捨てし郎等の、一人は母、一人は子なり。などや弔ひの御言葉をも出され

ぬ かほど數ならぬ身には思のなかれかし。あら恨めしの憂世や、あら恨めしの憂世や。

ワキ詞 是は思ひも寄らぬことを承り候ものかな。我等如きの山伏の、五人三人行連れ、通り候が、今夜此の攝待に十二人着きたればとて、判官殿とは、かゝる疎忽なることを承り候ものかな。さりながら、嗣信、忠信の母にてましますば、判官殿の御内の人の名字をば御存じ候べし。そなたより名を指して承り候べし。シテ仰の如く、我が子は御内にありし者なれば、大方は推量申すとも、さのみはよも違ひ候はじ。兼房かやうに物申す山伏をば、どこ山伏と御覽じて候ぞ。シテ先づ唯今物仰せられつる客僧は、此の御供の中に、一は一の老體にて御入り候なり。いで此の御供の中に、年寄りたる人は誰ぞ。や、今思ひ出したり。判官殿の御めのと、増尾の十郎權の頭兼房山伏にてましますな。又あれなる山伏はどこ山伏

にて御渡り候ぞ。ツレ鷲尾是は出羽の羽黒山より出でたる客僧にて候。シテいや是は播磨の人の聲にて候。それを如何にと申す



佐藤 嗣信 (筆齋容池菊)

に、此の姥はもと播磨の者、十三の年、繼母を恨み都に上り、故莊司殿と契り、嗣信、忠信を設け、今かく憂目を見候へば、唯恨めしうこそ候へ。されば、我が國の人の聲なれば、などかは知らで候べき。いで此の御供のうちに播磨の人は誰ぞ。是も思ひ出して候。判官殿鴨越とやらんを通り給ひし時、狩人の姿にて参りあひ、其のまゝ、名字賜はり、今までも御供と聞えし鷲尾の十郎山伏にて御渡

り候な。ワキさて、かう申す山伏をば、どこ山伏と知らし召されて候ぞ。シテ此の御聲こそ大事にて候へ。都の人の聲かと思へば、又近江の人の聲にも似たり。物仰せられ候も何とやらん物々しく見え給ひて候。あつはれこれは西塔山伏ござめれ。それならば、元は近江の人、三塔一の遊僧、今は又我が君の、一人當千の武士よのう。地、武士も物の哀れは知るものを、などされば餘りに御心強くましますぞ。明かさせ給へ人々と、他所目も知らず泣きゐたり、人目も知らず泣きゐたり。
子方、詞、斯く心もなき人々に、さのみ言葉を盡し給はんより、今ははや御内へ御入り候へ。判官、暫く候。まこと嗣信の御子ならば、判官殿とおぼしきを指し給ひ候へ。子方、承りて候とて、十二人の山伏の、皆御顔を見渡して、是こそそにておはしませ。判官、詞、扱そにてあるべきとは、何故に仰せ候ぞ。子方、いや、如何に包ませ給ふとも、

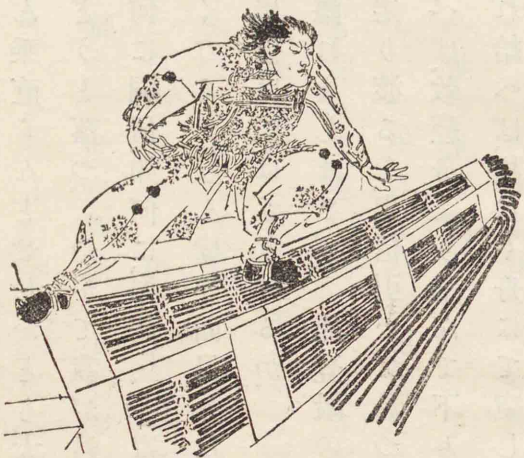
人にかはれる御粧、疑もなき我が君よ。地父給べのうとて走り寄れば、岩木を結ばぬ義經なれば、泣く／＼膝に抱き取る。げにや梅檀は二葉よりこそ匂ふなれ。眞に嗣信が子なりけりと、他所の見る目まで、皆涙をぞ流しける。

ワキ「詞、今は何をか隠し申すべき。我が君にて御座候、此の上は御座を直され候へ。老尼も近う御参りあつて、御目に懸り申され候へ。シテ、あら有難や候。我が君を拜み参らするにつけて、子供のことこそ思ひ出でられて候へ。ワキ「げに／＼尤もにて候。シテ、如何に申上げ候。嗣信が屋島にての最後の有様、剛なりとも申し、また不覺なりとも申す。いづれか眞にて候やらん、承りたく候。判官「如何に辨慶。ワキ「御前に候。判官「嗣信が屋島にての最後のさまを、委しく語つて老尼に聞かせ候へ。ワキ「畏つて候。御説と申し所望と云ひ、懇に語つて聞かせ申し候べし。御前近う御参り候へ。

門脇殿
平教經

候へ。

物語「扱も屋島の合戦、今はかうよと見えしに、門脇殿の二男能登



平教經 (筆齋容池菊)

守教經と名乗つて、小船に取乗り、磯間近く漕寄せ、「如何に源氏の大将源九郎義經に、矢一筋まゐらせん、受けて見給へ。」と罵る。かう申す各、を初として、皆御矢面に立たんとせしが、何とやらん心おくれたりし所に、嗣信は心まさりの剛の人にて、御馬の前に駈塞がつて、「義經是に在りや。」とて、につこと笑ひて控へたり。扱其の時に、教經は、引設けたる弓なれば、矢坪を指してひようと放つ。過たず、嗣信が着たりける、鎧の胸板押しつけ

上卷、かけずたまらずつゝと射通し、後に控へ給ふ我が君の御着背きせながの草摺にはつたと射留む。扱其の時に嗣信は、馬の上にて乗直らん乗直らんとせしかども、大事の手なれば堪へずして、馬より下にどうと落つ。やがて我が君御馬を寄せ、嗣信を陣の後にかゝせ、如何に嗣信、如何に、如何に。』と宣へども、たんだ弱りに弱つて、終に空しくなる。なんぼう面目もなき物語にて候。シテ、扱其の時に弟の忠信は候はざりけるか。ワキ、あら愚かや。忠信は、日の下に於て隠れましまさず。能登殿の童菊王丸、嗣信が首を目懸け渚の方に走り渡るを、忠信引いて放つ矢に、菊王が真中射通され、かつはと轉べば、教經舟より飛んで下り、菊王が綿上わたがしつかんで、遙かの舟に投入れ給へば、程なく舟にて空しくなる。眼前兄の敵をば、弟の忠信こそ取つて候へ。シテ、扱は敵も大將に仕へ申しし御童。ワキ、嗣信は又我が君の祕藏におぼせし御内の人。シテ、扱は平家の舟の内。

ワキ、此方は源氏の陸の陣。シテ、扱も主従。ワキ、是も主従。シテ、扱は同じ思なれば。ワキ、他所の歎を思ひ合せて、御慰みも候へとよ。シテ、扱それは仰までもさむらはず、御身代りに立ち参らす上は、今世後世の面目なり。さりながら、一人なりとも御供申し、御笈をも肩に掛け、此の御座敷にあるならば。地、十二人の山伏の、十三人も連りて、唯今見ると思はば、いかゞは嬉しかるべき。クセ、其の時義經老尼に語り給ふやう、屋島にて嗣信、今はかうよと見えし時、思ふことあらば委しく言置けと、くれぐれ尋ね問ひしに、嗣信其の時に、息の下より申すやう、弓矢取る身の、御身代りに立つこと、二世の願や三世の御恩を少し報謝する、命の輕き身は、露塵何か惜しからん。さりながら故郷に、八旬に及ぶ母と、十に餘る童部、是等がことの不便さぞ、少し心にかゝる雲の、月に覆ひて光も闇くなる如く、其のまゝくれぐれと、終に空しくなりけり。判官、かやうに郎等

を討たせつゝ、地自ら手を碎き、忠勤まこと曇らずば、終に治まる世に出でて、嗣信、忠信が子孫を尋ね出して、命の恩を報ぜんと思ひしことも空しく、我さへかゝる姿にて、其の名をだにも名乗り得ぬ、憂身の果ぞ悲しき。

シテ母は思に堪へかねて、更くるも知らず有明の月の盃取出し、御酌にこそ参りけれ。判官げにや心を汲みて知る、人の情の盃を、涙と共に受けて持つ。子方、鶴若酌に立代り、別れし父の御前にて、給仕すると思ひなして。地、十二人の山伏の、終夜の酌を取廻り、座敷にも直らで、進み勇める有様を、父に見せばやとぞ思ふ。

地、さる程に、夜もほのくゝと明行けば、夜もほのくゝと明行けば、暇申してさらばとて、はや此の宿を立出づる。子方、如何に誰かある、馬に鞍置き、弓鞞参らせよ、君の御供申さうずるに。シテ詞、そも御供とは何事ぞ。子方、君の御供申してこそ、親の敵にも逢ふべけれ。

石川啄木
名は一人、岩手
縣の人、文治
五年、明治四十
五年、癸卯、年
十七

シテ、それは弓矢の御供なり、是は修行の山伏道に、何の敵のあるべきぞ。子方、さあらば思ひ出したり。小さき頭巾、篠懸を、疾く拵へてたび給へ、山伏道の御供せん。ワキ詞、辨慶涙を押へつゝ、如何に申さん、鶴若殿、まこと御供ありたくば、今日は道具を拵へ給へ、明日は迎に参るべし。子方、まことさふか。ワキ、なかゝに。兼房、我も迎に参るべし。ワキ、我も迎に参らんと。地、面々聲々に賺されて、いとけなき身の悲しさは、真ぞと心得て、少し言葉の弱りたる、折を得て客僧は、泣くゝ宿を出でければ。シテ、老尼は鶴若を抱き入れ。地、行くは慰む方もあり、止まるや涙なるらん、止まるや涙なるらん。

二六 家

けさもふと目の覺めし時、

石川啄木

わが家と呼ぶべき家のほしくなりて、
顔洗ふ間も、そのことをそこはかとなく思ひしが、
勤先より一日の仕事を終へて歸り來て、
夕餉の後の茶を啜り煙草をのめば、
むらさきの煙の味ひの懐かしさ、
はかなくもまたそのことのひよつと心に浮び來る。――
はかなくもまた悲しくも。

場所は鐵道に遠からぬ、
心おきなき故郷の村はづれに選びてん。
西洋風の木造のさつぱりとしたひとかまへ、
高からずとも、さてはまた何の飾はなくとも、
廣き階段とバルコニーと明るき書齋……

げにさなり、坐り心地のよき椅子も。

この幾年に幾度も思ひしはこの家のこと、
思ひしごとに少しづつ變へし間取のさまなどを、
心の中にゑがきつゝ、
ランプの笠の眞白きにそれとなく眼を集むれば、
その家に住む樂しさのまぎく見ゆる心地して、
泣く兒に添乳する妻の一間の隅のあちら向き、
そを幸と口元にはかなきゑみものぼり來る。

さてその庭は廣くして、草の繁るに任せてん。
夏ともなれば、夏の雨、おのがじしなる草の葉に、
音立てて降る快さ。

丸善
東京市日本橋
区にある書籍
店

またその隅にひとと大樹を植ゑて、
 白塗の木の腰掛を根に置かん。……
 雨降らぬ日はそこに出て、
 かの煙濃く薫よきエジプト煙草ふかしつゝ、
 四五日おきに送り來る丸善よりの新刊の
 本のページを切りかけて、
 食事の知らせあるまでをうつら〜と過すべく、
 また事々につぶらなる眼を見開きて聞きほるゝ
 村の子供を集めては色々の話聞かすべく……。
 はかなくもまた悲しくも、
 いつとしもなく若き日に別れ來て、
 月々のくらしのことに疲れゆく

都市居住者の忙しき心に一度浮びては、
 はかなくもまた悲しくも、
 懐かしくていつまでも棄つるに惜しきこの思。
 そのかず〜の満たされぬ望とともに、
 初より空しきことと知りながら、
 妻にも告げず、眞白なるランプの笠を見つめつゝ、
 ひとりひそかに熱心に心の中に思ひつゞくる。(啄木全集)

現代國語讀本 卷八終

現代國語讀本



大正十二年十一月廿七日印
 大正十三年一月一日訂正再版印刷
 大正十五年十月二十日修正三版印刷
 昭和二年二月四日訂正
 大正十二年十一月三十日發行
 大正十三年一月四日訂正再版發行
 大正十五年十月二十三日修正三版發行
 昭和四年四月版發行

現代國語讀本
 卷一 二金四拾七錢
 卷二 一六金四拾六錢
 卷三 一六金四拾六錢
 卷四 一六金四拾六錢
 卷五 一六金四拾六錢
 卷六 一六金四拾六錢
 卷七 一六金四拾六錢
 卷八 一六金四拾六錢
 卷九 一六金四拾六錢
 卷十 一六金四拾六錢

著者 八波則吉
 發行者 株式會社 東京開成館
 代表者 松本繁吉
 印刷者 新井修平
 西部販賣所 大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角
 三木佐助
 東部販賣所 東京市日本橋區數寄屋町九番地
 林平次郎

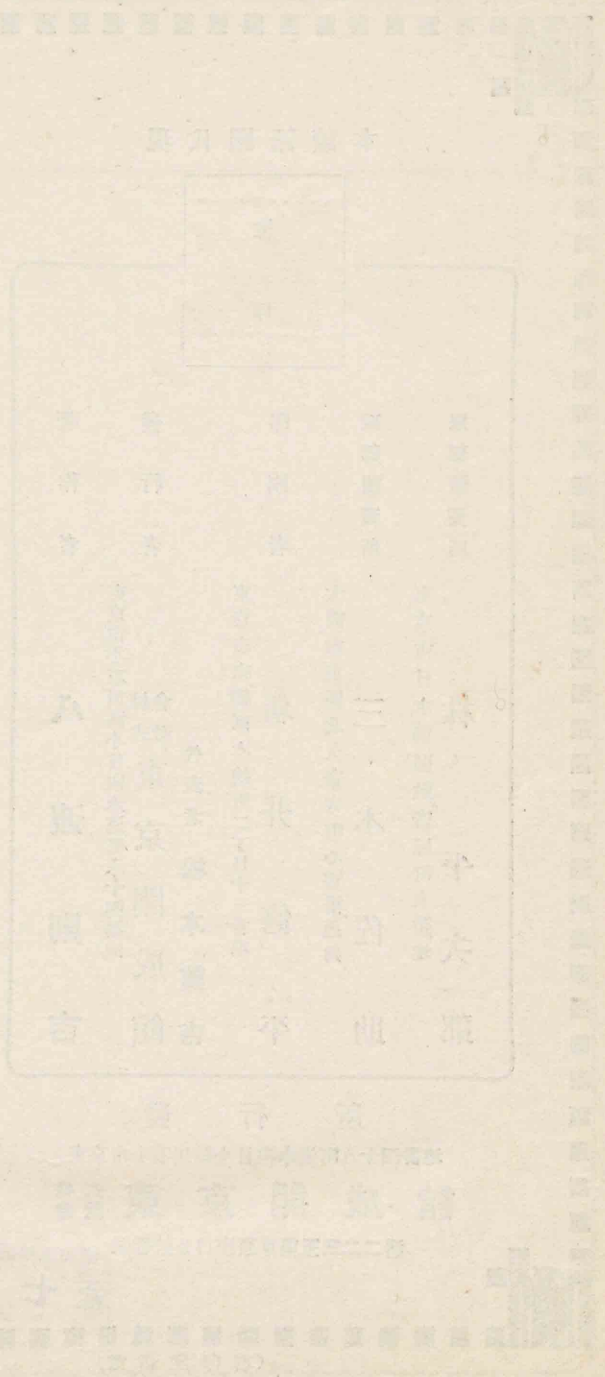
發行所
 東京市小石川區小日向水道町八十四番地
 株式會社 東京開成館
 振替貯金口座東京第五二二二番

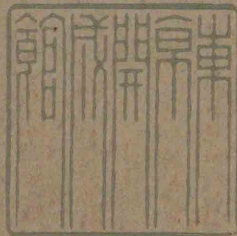
昭和五年臨時定價
 金七拾壹錢

(印刷堂新電)

昭和六年臨時定價
 金六拾八錢

木村信徳





広島大学図書

200090696



27
696